

2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば

大会報告書



2003 The Intercollegiate Men's Volleyball Championships among the Finalists from the East and West

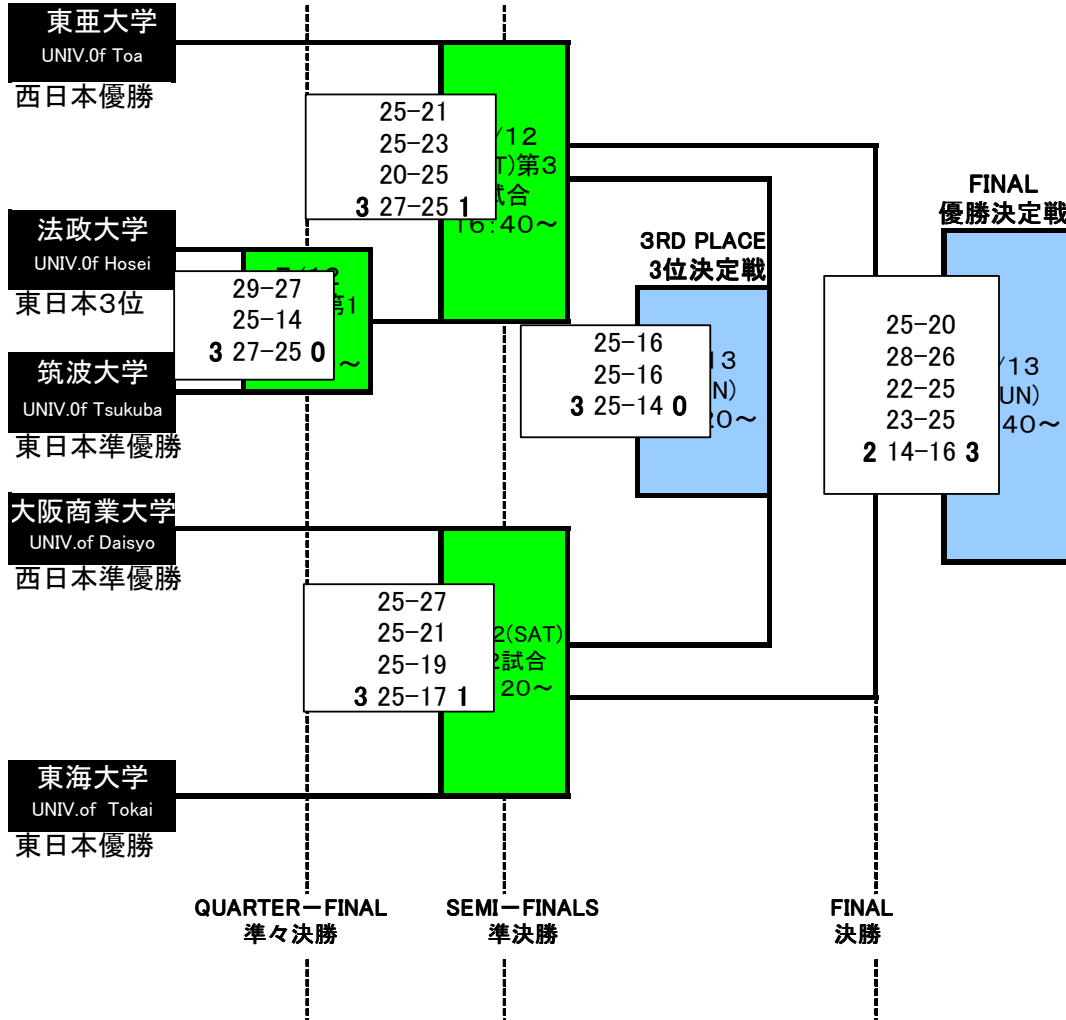
THE OFFICIAL REPORT

Of “2003The Intercollegiate men’s volleyball championships
among the finalists from the east and west”

目次

- I. 大会公式試合結果
- II. 2003 東西インカレ実行委員会実施運営組織図
- III. 報告概要
- IV. 各セッション報告
 - ・「2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくばを終えて・・・」
トーナメントディレクター 都澤 凡夫
 - 《1》 マネジメントセッション総務委員会
 - 《2》 マネジメントセッションショータイム委員会
 - 《3》 マネジメントセッションバレーボール委員会
 - 《4》 マネジメントセッションレセプション委員会
 - 《5》 クリエイティブセッションオフィシャル
 - 《6》 クリエイティブセッショングッズタスク
 - 《7》 クリエイティブセッションPR タスク
 - 《8》 クリエイティブセッションスポンサータスク
 - 《9》 事務局会計報告
 - ・「“繋ぎ” のバレーから “繋ぎ” の社会を！」
チーフマネージャ 松田 裕雄
- V. 大会公式調査結果
- VI. 大会報道状況

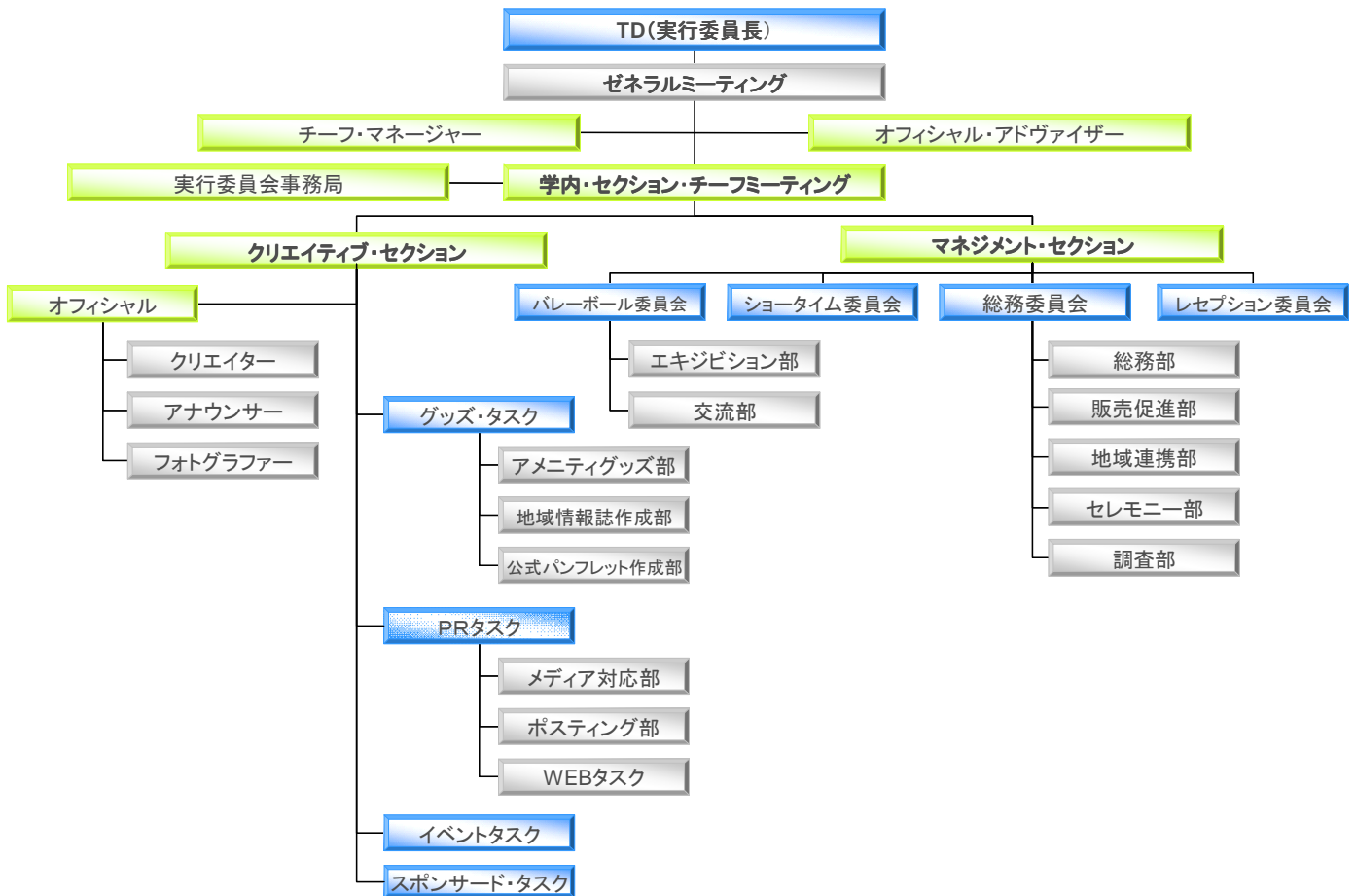
I. 大会公式試合結果



優勝 : 筑波大学 (東日本)
 準優勝 : 大阪商業大学 (西日本)
 第三位 : 東海大学 (東日本)

スパイク賞 : 金子隆行 (東海大学)
 猛打賞 : 柴田恭平 (筑波大学) 吉田譲 (大阪商業大学)
 ブロック賞 : 鈴木健太 (東海大学)
 リベロ賞 : 勝野裕士 (筑波大学)
 レシーブ賞 : 吉田譲 (大阪商業大学)
 セッター賞 : 日下慎吾 (筑波大学)
 サーブ賞 : 堤 政博 (東亜大学)
 最優秀選手賞 : 柴田恭平 (筑波大学)
 優勝監督賞 : 都澤凡夫 (筑波大学)
 迫力満点で賞 : 柴田恭平 (筑波大学)

II. 2003 東西インカレ実行委員会実施運営組織図



Ⅲ. 報告概要

1. 「 2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば

大会報告書

THE OFFICIAL REPORT

」

文書形式による報告書。大会試合結果報告，実行委員会組織内部報告，大会全体調査結果報告を盛り込んでいる。

2. 「 大会プロモーションビデオ 」

大会全体の模様をプログラムに沿った形で，約5分間のダイジェスト版として，視覚，聴覚，第六感に訴えることを目的として作成した映像。

3. 「 実行委員会プロモーションビデオ 」

大会理念とともに歩んできた実行委員会のワーキング内容及び生の感想を収録，編集した新しい形の報告映像。

IV. 各セクション報告

「2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくばを終えて・・・」

トーナメントディレクター

都澤 凡夫

7月12日、13日の両日に渡り、2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくばを成功裡に終えることができ、これも皆様のお陰と心から感謝申し上げます。

この大会は学生の競技レベルの向上と地方のバレーボール普及を狙いとし、全日本学生バレーボール連盟の強化委員会が昨年度から新設した大会です。

昨年は広島に加計町という小さな町で、JR 加計線廃止の記念行事として開催されました。第1回大会が西日本で行われましたので、第2回大会は東日本でと見え、つくば市で開催したいと手を挙げました。これといった見通しがあった訳ではなく、「何とかなるだろう」というのが本音でした。それから、つくば市バレーボール連盟副会長の木幡さんと藤沢市長に直訴に行ったのが活動の始まりでした。

事が成功を収める時には、天のとき、地の利、人の和が大切であるということがよく言われます。この大会はまさに天の時というタイミングでした。この時期、つくば市では「科学の街つくば」の顔だけではなく、「スポーツの街つくば」、「音楽の街つくば」の顔を創出する試みをしていたのです。大学側でも来年からの国立大学法人化に伴い、地域貢献事業を打ち出していました。これまで各運動部は個別に公開講座など各種のイベントを開催していましたが、これを「つくばユナイテッド」という事業体でこれからは大学から積極的に地域の皆様にスポーツ文化を享受していただくという方針が出た矢先でした。大学の一流選手が集まる大会はまさに、市、大学双方にメリットがあったのです。

素晴らしい地の利もありました。つくば市バレーボール連盟、商工会、体育協会、ホテル組合、教育委員会の地元つくばを愛する方々が全国にアピールするために大きな力を発揮して下さいました。さらに筑波大学という総合大学には素晴らしいタレントが沢山いました。その人たちがボラティアとして、熱い心で寝る時間を削って大会のロゴマークから体育館のデザイン、運営にいたるまで全てプロなしの手作りで大活躍してくれたのです。

人の和こそがこの大会が成功した秘訣であったかもしれません。その中心で活躍してくれたのがチーフマネージャーの松田裕雄君でした。Not “Sports for sports”, But “Sports for all” の精神は現在の競技スポーツをよくあらわしています。この精神で学内のバレーボール団体（体育会バレー部、医学専門学群バレー部、同好会バレー部）を見事に連携させ、まず学内の認知度を高めながら、外へ向かって100人余りのスタッフを組織してくれました。「人へ、社会へ、そして次世代へ、普遍の魅力を・・・」というサブテーマはまさにバレーボールの素晴らしい汗を競技者だけのものにしたくないという願いがこもっています。「バレーボールを中心において、様々なイベントで交流を図りながら、体育館自体を心地よい場所にしたい。」という発想は私自身今までにないショックでした。若い力と感性を統合してくれた松田氏に改めて感謝いたします。

2004年の大会もつくば市で開催されることが決定しています。この大会がさらに発展し、「つくばモデル」が日本国中に広まることを期待しています。

最後に、貴重なアドバイスをいただいた全日本学生バレーボール連盟の市川伊三夫会長をはじめ役員の皆様、この大会に賛同して下さいましたミキプルーンをはじめとする協賛47社の皆様、そして大会の運営に携わって下さった全ての団体、スタッフ、選手、観客の皆様、に心より御礼申し上げます。

《1》 マネジメントセクション 総務委員会

1. 総務部

1) - I. 実務進行課スタッフ対応

チーフ 田邊 志帆子 (医学女子)

1、取引先

- あっぷるハウス (弁当)
- かまどや (弁当)
- アコムレンタル (イベント用水槽、クーラーボックス)
- ユニマットオフィスコ (コーヒー)
- 日光天然氷本舗 (ジュース用の氷)

2、決算

- 弁当・・・・・・・・ 5 1 8 0 0 0 円
- アコム・・・・・・・・ 2 0 3 7 0 円
- ユニマット・・・・ 1 0 0 8 0 円
- 氷・・・・・・・・ 1 5 2 4 0 円
- お茶菓子・・・・ 8 4 4 9 円
- 合計・・・・・・・・ 5 7 2 1 3 9 円

3、人員の過不足

- 基本的に人員不足だった。特にお昼は人手がたりず、弁当を取りに来た人をチェックできなかった。

4、反省・問題点

- 弁当の数が直前まではっきりしなくて困った。また、弁当をいらないと言っていた人が多数弁当を取りに来たため、2日目は弁当が足りなかった。
- 選手は試合やアップがあるため、決められた時間に弁当を取りに来ることが難しいので、選手の弁当の時間はもう少し考慮すべきだった。
- スタッフが個人で弁当を取りに来るとチェックが間に合わないので、スタッフへの弁当の配布の仕方を工夫すべきだった。
- 販売の物を置くところとスタッフ控え室が同じだったため、控え室の鍵が閉められず貴重品の管理があまりできなかった。

1) - II 実務進行課選手対応

チーフ 牧野 仁人 (医学男子)

① 関係機関

- 東海大学 (東日本1位)
- 筑波大学 (" 2位)
- 法政大学 (" 3位)
- 東亜大学 (西日本1位)
- 大阪商業大学 (" 2位)

② 制作物

- 第1次発送書類・・・返信用書類 (レセプション参加者数、宿泊者数、弁当数、パンフレット数の確認・交通手段の確認)
詳しいタイムスケジュール

(球体使用時間等を組み込んだ物)

第2次発送書類・・・弁当引換券

レセプションチケット

会場案内図(当日の席、動き方の説明を書き込んだ物)

会計請求書(パンフレット、レセプション、弁当代)

交通費申請書

③ 必要人員

各大学に一人の担当者

④ ワーキングスケジュール

☆当日までの流れ

東日本インカレ・・・6月19～22日

西日本インカレ・・・6月26～29日

東日本インカレ終了後、東日本参加チームが決定した直後に大学への書類発送(大会要綱に同封)を行った。西日本のチーム分は、直接大会へ持参した。書類の締め切りは7月3日(木)とした。実際は、西日本のチームにはFAXで返信して頂いた。郵送で行うよりも、早く簡単に済むので、FAXを利用するのが良いと思う。

実際に大学側と電話で打ち合わせを開始したのが、7月2日(水)であった。その後は、質問などがあれば随時担当者に伝えてもらうことにして、こちらからも、詳しい内容が決まり次第連絡をするようにした。

7月3日に第2次発送書類の作成を行い、4日(金)に発送した。交通費申請書は当日受付で回収することとした。振込みの領収書を当日持参して頂き、受付で確認してから、パンフレットを渡すという形をとった。

☆当日

会場に選手が到着した後、大学代表者と受付を行う。パンフレット、参加賞はここで手渡した。座席まで誘導し、代表者に会場内の説明、セレモニーでの動き方の説明、タイムスケジュールの確認を行った。この時、競技関係資料を手渡した。

球技体育館でのアップに同行し、バスの手配をする。試合の進行状況を確認しながらカピオに戻る時間を調整する。どこの大学も早めにアップを済ませていたので、試合時間に遅れるということではなかった。

選手と大会運営側との橋渡しをするのが主な仕事である。試合によって時間が動くこともあるので、臨機応変に対応することが必要だ。

⑤ トラブルと改善点

座席の区別が分かりにくかったため、大学用の席に一般の観客の方が座ってしまった。また逆に、大学が席を使いすぎてしまうこともあった。

→区別をしっかりと、決められた席に座るようにしておいた方が良いと思う。

当日、大学から質問を受けたときに、誰に確認すれば良いのかははっきりしない場合があった。

→事前に確認しておく必要がある。

試合前の体育館入り口への移動時間がはっきりせず、バタバタしてしまった。

→試合前のショータイムについて把握しきっていない人から指示が出されたこと。対応係が細部まで把握していなかったこと。の二つが原因である。進行を妨げる事はなかったが、関係者・チームに多少なりとも迷惑をかけてしまったことを反省している。

表彰品が持ち帰れない

→遠くから来ているチームには郵送する。又は、表彰品を工夫するなど、考えるべきである。

⑥ 反省・感想・改善点など

大学側からは、さまざまな質問、要望などが出てくるので、全体(競技、ショータイム、レセプションなど)について良く把握しておく必要がある。特に当日は、すぐに確認する必要があるので、事前の確認が重要である。

当日、疑問になったことを聞く相手ははっきりしていなかったもので、これは誰に聞いたら良いのだろうか？と、戸惑うことがあった。係のくくり方を工夫する必要があるのではないだろうか。例えば、開会式については、この人に聞けばすべてが分かるというような、一日の中の一つのイベント全体を総括する人を作っておく必要があると思う。

筑波大は、ホームなので、応援が筑波に集中するのは、どうしても仕方ないことだが、担当したチームに「応援もなくして惨めな気がした。」と言われたときは、残念な気がした。もう少し、何らかの形でチームへの配慮は出来ないだろうか。せっかく来てくれたチームに、気持ちよく試合して欲しいものである。

参加チームに最も近い立場に関わる者として、試合前の緊張感を肌で感じる事が出来た。どのチームも勝ちたい気持ちは同様。その姿を間近で見ることが出来たことを嬉しく思っている。

1) -III 実務進行課駐車場対応

チーフ 田仲俊樹 (体育男子)

取引先：都市交通センター、

予算：0円 決算：1059円

感想・意見等

第1・第2駐車場に300台くらい一般客の車を停めるつもりだったが場所が分かりづらかったためいくら誘導しても駐車場のほうに行ってくれなかったため二日間でのべ100台程度しか車が停まらなかった。第4駐車場は大会関係者のみという形だったのだがそのような知らせをしていなかったため一般客がたくさん来てしまった。大会関係者のみということ伝えほかの駐車場にまわってもらっていたのだが路上でほかの駐車場の場所を説明するしかなかったので渋滞を招いてしまった。結構、文句を言う客が多かったので対応が大変だった。事前にゲストやスタッフに駐車券などをくばってフロントガラスのところにおいてもらったらもっとスムーズに誘導できたと思う。

もし、来年もつくばでやるとしたらまた総務の仕事をやりたいと思う。

1) -IV 実務進行課総合対応

山田 華子 (医学女子)

北原 昌彦 (人間学類)

取引先：なし

予算・決算：なし

- 人員 : 2名
感想・反省 : 時刻表・タクシー会社の連絡先なども用意したが、聞かれなかった。
主に聞かれたことは、観客席の場所やトイレの場所について。それに対しては会場見取り図を用意しておいて良かった。
プログラムや試合結果を聞かれたので、大会会場にトーナメント表を用意して、随時結果を記録していったほうが良かったと思う。
基本的にひまだったので、招待客や出演団体対応の受付と合併してしまってもいいかと思う。
- スケジュール : 活動開始は6月下旬
つくば付近の交通関係、他のセクション（特に対応）に連絡を取り詳細を把握するとともに、マニュアルを7月第1週までに作成した。

1) - V 実務進行課ゴミ対応・管理

坂寄 健 (医学男子)

仕事内容

当日まで

- 6月 担当者決定。
筑波学園整備に挨拶の電話を入れる
分類(※1)についての指示を受ける
- 7月 当日の回収方法の指示を受ける。
一回収法自体は、ゴミ袋に詰めて破れないようにすればよいとのこと
ゴミ袋は市指定のものでなくてよい
回収時間は18時を予定していたが、試合時間の関係により翌朝7時半に変更
- 2日前 回収場所を相談する。
一回収時間が朝になったため、カピオの駐車場のチェーンロックが解除されないの

で

- 前日 ロックの前に回収車を路上駐車してもらい、引き渡してもらうことになる
カピオの担当者とゴミ置場について相談する。
一正面玄関傍の立体歩道下にある倉庫をゴミ置場として開放

当日

- 開館前 ゴミ箱, 灰皿の設置
開館中 会場内にて散乱ゴミの回収, ゴミ箱がいっぱいになったら取り替え、倉庫に運ぶ
翌朝 筑波学園環境整備の方に引き渡す

※1 ゴミの分類

- 筑波学園環境整備の指示のもと行った。
- ・可燃ゴミ(ペットボトル, スチロール, 弁当の残飯含む)
 - ・空き缶
 - ・空き瓶
 - ・木材(1m以内にまとめる) の4つに分類

備品

- ゴミ袋…50枚
ゴミ箱(レントオールよりレンタル)…大(バケツ状) 10コ、小 10コ、灰皿 5コ

取引先

- 筑波学園環境整備

反省点

- ・ カピオ内にもともとあったゴミ箱、灰皿を片付けなかったため回収が面倒になった。
- ・ 回収方法についてカピオの方と前日まで相談していなかったため、直前で変更することになってしまった。
- ・ ゴミはほとんどスタッフが出している。来年は弁当係がゴミ担当をかねるのが良いと思う。その際、段ボールは使わず、ビニール袋で配達してもらおう方がよい。

感想

- ・ 選手対応と一緒にやるのは辛い。
- ・ 当日、スタッフのゴミに対する意識の低さにうんざりした。
- ・ 来年はやりません。

1) -VI 実務進行課関係各者対応

チーフ 矢澤 智子 (医学女子)

1. 関係者対応(ゲスト・VISITOR)

<予算・決算>

なし

<人員>

発送作業は5、6人の人手が必要。それ以外は1人で可能。

<取引先>

ゲスト、VISITOR 各個人

<スケジュール>

6/10 第一次発送

6/20 第一次発送返信締め切り

7/1 第二次発送

<トラブル>

返信はがきについて

期日までに返信がきたものが少なかった。期日を過ぎて送られてくるものが多く、大会直前まで何度も名簿の修正を行わなければならなかった。

宿泊について

問題にはならなかったが、レフェリーや遠方から来る方には大会当日の宿泊だけでなく、前日の宿泊についても確認したほうがよい。

ゲスト・VISITOR について

ゲスト・VISITOR に関しては、それぞれ待遇が違うので、一緒に来た場合などの対応が難しかった。学連との間でコミュニケーションがとれていなかったために当日になって対応する部分が出てしまった。

Vリーグ選手に関して

出欠の連絡が直前だったため、発送が間に合わず、当日対応する選手が出てしまった。

交通費に関して

二次発送から大会当日までに日数がなかったため、大会当日に申請書を提出していただき、後日振り込む形になってしまったが、大会前に提出してもらったほうが早く対応できたと思う。

<東西インカレを通して>

返信をもらうには時間がかかるので、時間的にもっと余裕をもって発送をするべきだった。

直前に連絡があって出席するひが多く、名簿が完成したのが前日になってしまった。

つくば市内外から多くの関係者の方が参加してくださってよかった。

各種対応として、他の対応担当者とうまく連携がとれていない部分もあった。

2. 関係者受付

<人員>

今回は各日5人で交代で対応した。さまざまな出来事に対応できるように、必ず1人は受付にいるようにした。朝の受付が混雑する時間は3、4人の対応者が必要である。

<東西インカレを通して>

混雑する時間以外は1人か2人で十分対応できるが、各担当とすぐに連絡がとれるようにしたほうがよい。

大会に関してさまざまなことを聞かれるので、対応できるよう、事前に各セクション、担当と話をしておく必要がある。当日、各団体の人が個人的に受付に聞きにくることがあったが、対応者でなければ分からないこともあり、すぐに対応できないこともあった。

受付が大変なのは1日目の朝であり、今回は当日の朝に受付のミーティングをしたが、ばたばたしてしまったので、もっと事前にミーティングをして対応できる準備をしておくべきだった。

大会1日目と2日目、両日出席してくださる方が多かったが、その場合2日目に受付に来ていただく必要性があまりなく、受付に来るか来ないかが曖昧になってしまった。

全体としてみると、5人いたため比較的スムーズにできたと思う。

3. 障害者対応

今回は、各日1名ずつ大会に来てくださったが、それぞれ付き添いの方がいてくださったこともあり、当日の対応としては座席に案内することだけだったので、1名で十分対応できた。あらかじめ座席までのルートやトイレ等を確認し、座席を明確にしておく必要はあると思う。特に問題はなかった。より多くの方が大会に来て楽しんでいってくださればと思う。

4. 全体の感想

今回やらせてもらった仕事は全部一貫していて、1人でやるのが大変なときもあったが、多くの人がサポートしてくれて、とても助けられた。東西インカレの仕事は大変だったが、それでたくさんの方のつながりができた。今まで知らなかった多くの人と知り合えて、一緒に仕事ができよかった。

来年に向けては、今回の反省を生かせばさらによいものができると思う。今回やってみて、直前まで終わらない部分もあったので、もっと早くから始めて時間にゆとりがあればいいと思った。

2) - I 地域連携課展示物担当

チーフ 高橋沙矢香 (人間学類)

① 関係機関

国土地理院
JAつくば市
つくば市商工会
つくば市役所 新線推進室
つくば市役所 都市整備課

② 制作物

展示品紹介の説明書き
注意書き

③ 必要人員

パネルの設置、机の設置には 10 名程度の人がいると、スムーズに行える。今回借用したパネルは、一つを組み立てるのに 3、4 人の人が必要であった。

ポスター・パンフレット等の展示には、多くの人は必要ない。

④ ワーキングスケジュール

当日まで・・・展示の仕事では、当日までが主となる。

6 月初旬に各関係機関に展示品出展の依頼をした。

各関係機関と、展示内容・必要物品の確認を行い、それぞれの展示スペースの配分を考えた。

なかなか展示品が集まらなかったり、担当者の方と連絡が取れなかったりして直前になってばたばたした感じになってしまった。

当日・・・大まかな動きの流れしか考えていなかったため、スムーズな進行とは言えなかった。

⑤ トラブル

いざ、パネルを組み立ててみると、高さが違うものであった。

テーブルクロスが不足した。

などの問題が生じ、準備には思いのほか時間がかかった。

当日は、置いておいたペンが持ち帰られたりしてしましたが、特に大きなトラブルもなかったのが良かった。

⑥ 反省・感想・改善点等

パネルについて細かい部分まで確認していなかったため、設置に時間がかかった。下準備が不足していた。

パンフレットを持ち帰ってくださる方が結構多く、関心を持ってくれたのではないかと思う。遠くから足を運んでくださった方、また、つくば市に住んでいるけれど知らなかった方に、つくばについて知って頂けたのであれば、嬉しい限りである。

当日の観客のうち、どのくらいの方が展示を見てくださったのか、また、見てくださった方はどのように感じたのか、も知りたいと思った。アンケートに加えてもらえたら良いのではないか。

足を止めてビデオを見ている人の姿が見られ、単に展示だけでなく、様々な方法で訴えかけるべきだと思った。その点、ビデオは良かったと思う。

表彰品として商品を展示するのであれば、きちんと当日の管理をすることが必要だと感じた。

関係機関の方々が、協力してくださったお陰で、今回の展示が可能になった。本当に感謝している。

2) - II 地域連携課表彰品担当

チーフ 水野奈津子

1 ワーキングの内容

- ・ 大会におけるチーム、選手への表彰品の調達および管理
- ・ 選手、出演団体、ゲスト、およびスタッフ用参加賞の作製、調達および配布

- ・ 観客投票特別賞決定のためのアンケート調査とその準備（調査部との協力による）

2 ワーキングタイムライン

5月26日	つくば市商工会宛てに依頼文 ・ 設定する賞の説明 ・ 郷土品を表彰品とするための協力を依頼
6月8日	総務部ミーティングにて表彰品担当者を学生委員から決定
初旬	学連と連絡をとり学連からの賞と実行委員会からの賞を確認・調整
12日	参加賞作製へ向けた話し合い（豊里庁舎スポーツ振興課にて） 筑波物産代表：神谷大蔵さんとの交渉（スポーツ振興課の紹介） つくばにちなんだかえるのストラップ、ボールペン
16日	表彰品に関する話し合い（矢田部商工会館にて） つくば市商工会 鈴木誠さん、吉原則行さんとの交渉
中旬	表彰品、参加賞について実行委員会内で検討 →参加賞については金額等の面からオリジナルで作製することに決定 表彰状作製依頼
21日	参加賞作製についてふじトロフィーに依頼 →大会ロゴ入りオリジナルキーホルダーに決定
24日	つくば市商工会宛てに依頼文 ・ 表彰品としての郷土品の購入 （・同時に展示品の出展依頼）
7月初旬	のし紙作製 表彰状作製 表彰式の流れの決定とアナウンス原稿作成、セレモニー部との打ち合わせ
9日	観客投票特別賞用アンケート用紙印刷完了、投票箱完成
10日	桜商工会館に表彰品を受け取りに行く
11日	参加賞をふじトロフィーから受け取る 前日準備 ・ 表彰品の包装、のし付け ・ 参加賞の配布準備 ・ 投票箱の設置 ・ 表彰式についてセレモニー部との打ち合わせ
12日	2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 IN つくば ↓ 1日目終了後 観客投票集計、特別賞の決定
13日	↓ クロージングセレモニーにて表彰状、表彰品の授与
中旬	ふじトロフィーに参加賞代支払い完了 つくば市商工会に表彰品代支払い完了

予算

参加賞、表彰品合わせて ￥200,000

決算報告

表彰品：筑波米コシヒカリ 60kg	¥18,000
ハム詰め合わせ	¥12,000
酒 住の江	¥14,050
霧筑波	¥15,645

すいか羊かん	¥ 2,350	
ブルーベリー	¥350×69 個	¥24,150
	表彰品合計	¥86,195
参加賞：オリジナルキーホルダー	820 個	1 個約¥150
	¥150×820×1.05=	¥129,150
	参加賞合計	約¥129,150
以上	合計	約¥215,345

取引先

つくば市商工会を通して
 飯村農園 学園手造りハムの会
 ・ 株式会社 安井酒造店
 ・ 浦里酒造店
 ・ 御菓子司 梅月 代表：雨田賢二
 ・ ブルーベリー農園 東郷幸夫
 有限会社 ふじトロフィー 代表取締役：田中成貴

役割分担

当日にいたるまで

表彰品、表彰状、参加賞：主に水野
 観客投票アンケート作成：津波古
 参加賞デザイン：倉本
 表彰状作製、のし紙作製、つくばっこ石像用たすきデザイン：小澤

前日準備と当日

表彰品の包装、のし付け：津波古、水野、セレモニー部から 3 人
 観客投票：調査部と協力

報告と反省

参加賞：実行委員会オリジナルキーホルダー

発注数 820

(選手 143、出演団体 326、バレーボール交流会参加者 100、ゲスト 60、スタッフ 176、予備 15)

当初の案：かえるのストラップ、ボールペン、「幸せむかえる」、ピンバッジ等

- ・ 悩みに悩んだ結果、この東西インカレに関わった人々の思い出に残る、参加賞としてふさわしいものを作製することができた。最初に交渉をさせていただいた筑波物産さんにはたいへん申し訳なかったが、ふじトロフィーさんのご尽力により素晴らしいものになった。
- ・ 今回は発注が遅かったうえに数の変更があったため、ふじトロフィーさんに多大なる負担をかけてしまったことを反省している。
→作製案をもっとはやくに打ち出し、業者に依頼するのも最低 1 ヶ月前にするべきだった。
- ・ 選手、出演団体、バレーボール交流会参加者、ゲストには、各対応係がいたため確実に配布がなされたが、スタッフへの配布がうまくいかなかった。特に、(学生スタッフではなく)市の実行委員の方へ当日に配布することができなかった。
→はやめに作製しておいて ID と一緒に確実に配布すべきだった。

表彰品各種

- つくば市の郷土品を表彰品としたのは、今大会の趣旨である「地域とのつながり」にあった素晴らしい企画であった。これを実現するにあたり、つくば市商工会に多大なるご尽力をいただき、たいへん感謝している。また、つくば市商工会を通じて郷土品を提供してくださった各加盟店舗のご協力にもたいへん感謝している。同時に、郷土品を表彰品としたことで、選手、観客など、今大会にかかわった人々につくば市の魅力を伝えることができたと感じている。
- 表彰品の管理にはもっと気を配らなくてはならなかった。つくば市商工会はじめ各店舗にご協力いただいた結果手元に届いた品々なのだから、扱いには充分注意しなくてはならなかった。表彰品担当者は自分だけでなく、手を触れる人には取り扱いに注意することをもっと意識させなければならなかったと思う。
- セレモニー部との打ち合わせ不足だった。表彰品担当者と表彰式を取り仕切る人が違ったため、もっと事前に打ち合わせをするべきだった。賞を授与する選手、表彰品を手渡してくださる方、音楽を演奏してくれる楽団、アナウンス、そして表彰品の数々などの要素が合わさって表彰式というひとつのものができあがるわけで、そういったものをつなげて考えておかなければならなかった。
→セレモニー部の中に「表彰式」の担当者がいるとよいと思う。

表彰状

- 表彰状は表彰式において選手の名誉をたたえるものであり、不備やミスが許されないものであるのに、当日ミスがあいついでしまったことは、深く反省すべき点である。
- 技術賞を決定する学連と連絡不足だった。
- 表彰状が足りなくなった
→確実に管理をすべきだった。
予備をつくるべきだった。
- 黒盆を準備するのを直前まで忘れていた。
→上述したように、「表彰式」としての枠組みの中で準備をすすめるべきだった。
全体をみることで細かいところの詰めができると思う。

人員

今回はつくば市商工会がパイプ役となって市内の店舗を駆け回ってくださったさらなる隠れた郷土品を見つけるには車もちの学生委員が必要
そうでなくても同様に動ける人が2人はいると良かった

その他、個人的な感想

私自身にとって東西インカレを通して表彰品担当という重要な任務を果たせたことは、何事にもかえがたい素晴らしい経験となった。郷土品という”モノ”を通じて、自分自身はもちろん、選手、観客、実行委員の方々、そしてつくば市商工会をはじめとする作り手のみなさんといった、郷土品にたずさわるすべての”ヒト”がつながりをもった。それはきっと、単なるモノでは成し得なかったであろう。郷土品というつくば市の自然や歴史や市民が育んだモノであったから成し得たのである。表彰品の数々によってつくばの郷土のよさを再確認できて良かったと思う。

このように、表彰品という一部分に自らがたずさわって、2003 東西インカレ IN つくばを成功に収めることができた。これも、表彰品調達に多大なるご尽力をいただいたつくば市商工会の吉原さんをはじめ、参加賞作製を急ピッチですすめてくださったふじトロフィーの田中さん、デザインを担当してくださったクリエイターさん、一緒に表彰品を検討してくださったチーフマネージャーの松田さん、そして未熟な私にかかわってくださったすべて

の方々のお力添えのおかげである。

今年は初めての試みですべてが手探り状態であった。しかし、だからこそすべてにおいて必要性を想定することから作業がはじまり、とてもやりがいがあった。来年はある程度のマニュアルができている状態でやりやすいとは思いますが、今回のように常に必要性を感じながらすすめていかなければ、無味乾燥なものになってしまうだろう。来年やるのであれば、さらに魅力的なものを目指してまた力を注いでいきたいと思う。

3) 競技運営課

チーフ 家前 憲男 (体育男子)

【競技、当日運営】

1. 大会オフィシャルドクター依頼文
筑波大学向井直樹助教授に依頼した。
2. 大会オフィシャルレフェリー依頼文
依頼した各審判員に送付した。
3. 大会当日、球技体育館の練習割当 (第1案)
移動時間を含め、2時間を基本とした
4. 大会参加登録用紙
東日本インカレ、西日本インカレ終了後に東西インカレ参加が決まったチームにわたした。 (パンフレット作成のため)
5. エントリーシート
実際、大会にエントリーする選手、スタッフを記入していただいた。これは後日送付した。
6. 審判について (第1案)
国際バレーボール公認審判員は決定していなかったが、この時決まっていた日本バレーボール公認A級、B級審判員について記載したもの。
7. オフィシャルレフェリー
国際バレーボール公認審判員が決定した段階で作成した。
8. 競技準備物、必要物品のたたき台
競技準備物、必要物品のたたき台として自分の思いつくところを書き出したもの。
9. 当日運営全般のたたき台
当日運営全般のたたき台として思いついたところを書き出したもの。(総務、式典については既に決まっていたが、学連で行っていたものを思い出して、参考程度で作成してみた。
10. 競技関係荷物リスト
競技関係で必要な荷物を書き出したもの。
11. 競技当日必要物品
競技関係荷物リストの公式版
12. 学連に頼むものリスト
学連に持ってきていただくものを書き出し、学連にお願いした。
13. 競技当日の動き&備品 (1日目)
当日の動き、備品、要員、球技体育館の使用時間を時間ごとに書き出したもの。
2日目のバレーボール教室でネットを使用されると考えていたため最後にコートを2面にする予定であったが、ネットは必要なくなったため、2面にするのではなく、撤収した。
14. 競技当日の動き&備品 (2日目)
ネットは撤収された状態からスタート。

15. 臨時役員変更届
16. メンバー届
17. メンバー届 (アナウンス用)
18. 当日審判割当表
大会の始まる 1 週間ほど前にチーフの原田先生に確認して作成したもの。副審、IF の割り当ては自分が決めた。
実際は、当日大幅に変動。また、日本バレーボール協会公認 B 級審判員の川田公仁先生がこれなくなってしまうため、松代寛先生と交代した (これは審判の先生同士の話し合いによって決定した)。ラインジャッジについては、2 日目の 3 位決定戦は前日の予選試合の敗者ということにし、法政大学にお願いした。
19. 競技上の確認事項
20. 実行委員会からの注意事項
実際は、エントリー届、ラインナップシート、臨時役員変更届は各選手対応が持ち、それを当日、各代表者に渡すといった形にした。(2 日目、各大学が直接、ホテル→球技体育館→カピオという流れで行動できるようにするため)
21. 競技及び審判上の確認事項
東日本インカレにあったもの。
22. プロトコール (ママさん用)
23. プロトコール (1 日目第 1 試合用)
24. プロトコール (通常)
試合をなるべく早く始められるように公式練習を各 3 分と設定したが、実際は、審判から、規則だから。と言われ、各 5 分として試合を行った。

【選手対応】

25. チーム調査用紙ご記入の案内
26. チーム調査用紙
応援団によるエール交換は、最初は東海大学も選手だけで行うということであったが、応援団桐葉からの強い要望により、応援団だけで行うことになった。したがって、応援団桐葉と法政大学応援団の 2 つで行い、この 2 つが 5 チームすべてのエールを送るという形となった。

【意見・感想】

- ・ 今回、自分の強い要望で、関係ないすべてのラインをマスキングしたが、バトミントンのラインはほとんど目立たないのでマスキングはしなくても問題はない。
- ・ ラインテープの数はよく計算して購入すべき。
- ・ 学連関係 (学連委員や審判、役員等) とは、綿密に連絡をとりあっておくべきであった。

2. 販売促進部

チーフ 横沢 友樹 (医学男子)

1. 取引先

企業などとの取引はない。各セクションとの繋がりとなる。

- ・ パンプ
- ・ 情報誌
- ・ グッズ

- ・ レセプション
その他、注文などの受付の関係で、事務局と連絡を密にする必要があった。
- 2. 見積もり
各セクションが出した見積もりに従う。すなわち、販売独自では大した支出、収入はないが、販売物それぞれの支出分は回収しなければならない。
販売独自に、費やした費用は、でディスプレイ装飾費として、予算1万円。
- 3. 決算
販売独自の費用は、ディスプレイ装飾費が、約8000円となった。
その他の販売物については、別紙参照。
- 4. 人員の過不足
他のセクションから見ると、かなり余裕があったが、スタッフが試合を見る時間なども考えると、このくらいがちょうどよい。他のセクションの人員が少なすぎるように感じられた。
- 5. 感想
販売物を大量に製作しすぎたと思う。先に行われた、戦略会議の場で、製作数を折れずにもっと少なくすべきだと主張すればよかった。
個人的な考えでは、パンフは1000部、情報誌は500部程度の製作でよいと考えていた。結果、それでは、多少少なかったかもしれないが、売り切れで、足りないくらいが、販売での収支だけを考えるとよいと思う。
グッズも、品数を減らしてもよかったと思う。

3. セレモニー部

チーフ 平本 芳幸 (医学男子)

オープニングセレモニー

- ・ 今宿太鼓演奏
- ・ 選手入場
- ・ 開会宣言
- ・ 来賓・役員挨拶
- ・ 選手宣誓
- ・ 吾妻小マーチングバンド演奏

クロージングセレモニー

- ・ 竹園高吹奏楽部演奏 (以下継続)
- ・ 優勝杯返還・レプリカ授与
- ・ 各賞発表・表彰式
- ・ 来賓・役員挨拶
- ・ 閉会宣言

仕事内容

今回、今宿太鼓、吾妻小マーチングバンド、竹園高吹奏楽部が出演したが、これらの出演交渉はセレモニー部で行ったわけではなく、関わったのは打ち合わせの段階からであった。

つまり、提供された素材を使って計画をたてるのが、主な仕事であった。また、各団体との交渉は、演奏内容以外（移動や弁当など）の交渉は全てショータイム委員会に任せ、上、「時間枠を提供して、コンセプトを伝え、後は任せる」という方針の下、細かい打ち合わせはほとんどしなかった。また、挨拶の依頼も、レセプション委員会にまとめてお願いした。全体として、臨機応変当日勝負の方針であったため、前日まではほとんど仕事がなかった。

かといって、当日も基本的には入場口におけるタイミングの合図と、役員や来賓の誘導、マイクの高さ調整など、セレモニーを進行させるだけであり、それも優秀なスタッフに恵まれたため、座っているだけで終わった印象である。緊張感やプレッシャーは他の部署よりもあったように思うが、具体的な目に見える仕事は申し訳ないくらいに少なかった。

当初の計画では、オープニングセレモニーで場内暗転やスポットライトなど、照明効果を最大限に使い、エンターテイメント色の強いものにしたかったのだが、会場であるカピオの施設の都合上（機材利用は無料であったが、そのために人件費が莫大にかかるため）、照明がいっさい使えなかったため、断念した。使用可否の確認が大会直前だったため、代替案も出ず、結局普通の開会式になってしまったことが最大の反省点であり、また、このためにセレモニー部の仕事が激減した。

□各団体について

・今宿太鼓

会場中の注目を集め、セレモニーに観客の興味を集めることが目的。「勇ましく、派手に」というテーマを伝え、選曲は前日リハーサルで決めた。医学男子バレー部の練習の都合で、セレモニー部の人間が誰もリハーサルに立ち会えなかったため、選曲もアナウンサーに任せてしまった。

・吾妻小マーチングバンド

テーマも特に決めず、全てを顧問の先生に任せた。というか、問答無用で曲目も決められていたので、こちらとしてはただ見守るしかなかった。当初、バスの手配などの問題から、リハーサルはやらない予定であり、その旨も伝え、「リハーサルや音出しは小学校の体育館で済ませておく」と言われていたが、直前になり、顧問の先生がリハーサルをやるつもりでいたことが発覚し、説明も理解されなかったため、結局前日リハーサルを行った。リハーサルを行ったこと自体は良かったが、なぜこのような行き違いが生じたかは未だもって謎である。

・竹園高吹奏楽部

決勝戦とクロージングセレモニー間のつなぎから、表彰式のBGM、エンディングテーマの演奏。これらも全てイメージを伝えておくだけであった。当日、台本と照らし合わせて最終確認を行い、細かいタイミングなどを決めた。

□個人的なこと

「普通の開会式」や「普通の閉会式」をやるのなら、準備期間も人員もあまり必要ない。今回、もちろん普通のことをやるつもりはなかったのであるが、設備などの都合で照明が使えず、それを断念せざるを得なかったことが本当に残念であった。完全にビジョンができあがってしまっただけのため、それに代わるアイデアも出ず、結局今宿太鼓などもその迫力を増幅させることができなかつたので、中途半端なものになってしまったことが悔やまれる。機会があればリベンジしたい。

また、今回、医学男子バレー部の関わり方が、とても中途半端なものになってしまい、上

から仕事を嫌々やらされているような状況の人間がたくさんいた。もし、来年も東西インカレがつくばで開催されるような事態になった場合、部内で十分な話し合いを持った上で、関わり方を決めたい。やる気や興味のある人間はいるはずなので、その人がもっと主体的に関われるようにしたい。

4. 調査部

チーフ 高嶋 齋加 (体育専門学群)

1. 調査概要

観客調査・・・来場者を対象に、本大会のPR効果、大会の印象などを調査した。

観客投票・・・観客の投票によってチーム賞・個人賞をオリジナルに作るため投票を募った。

2. 当日までの準備

- ・質問紙、投票用紙作成
- ・回収ボックス作成
- ・回答依頼張り紙作成

3. 当日の調査方法

① 配布

会場から試合前頃まではカピオの入り口に立ち、来場者に手渡した。その後は会場内の回答デスクに置いていた。

② 回収

A) 回収ボックス・回答デスク設置

- ・ 1F 観客席入り口
- ・ 2F 観客席後部
- ・ 2F 階段横

B) 回収員が観客席を回り、回収

試合間に回収ボックスを持って観客席をまわり、回収した。

③ 回収率を上げるための工夫

A) ボールプレゼント (観客調査)

回答者の中から抽選で4人(12日2人、13日2人)に、ロゴマーク入り公式球をプレゼントした。尚、ボールにVリーグ選手のサインを入れた。

抽選方法：1日目は2試合目終了後、2日目は決勝戦終了後すぐに抽選会を行った。試合の2セット目終了後、アンケート用紙をひとつの回収ボックスに集めた。その際、名前のないものを省き、名前の見えるように紙を折りなおすという作業を行った。

※1日目プレゼンター：加藤陽一選手 2日目プレゼンター：

山村宏太選手

B) アナウンスで何度もアンケートのお願いおよびプレゼントの宣伝を行った。

4. 人員数

当日は7人で、配布、回収を行った。

※ 入場ピーク時や回収の時はこれで妥当。来場者が少なかった午前中などは、特に仕事がなく暇であった。

5. 結果

観客調査回収数

1日目 (7/12) 246

2日目 (7/13) 479
合計 725

配った調査用紙は、1400枚近くと推定されるので、回収率は50%を超えていると思われる。

アンケート回答者は7割が女性であった。また、つくば市内の人が約6割、それ以外が4割という内訳になっている。ボール抽選の効果は絶大なものがあった。抽選会のアナウンスを聞いて、続々と書いていた。抽選会も予想以上に盛り上がり、抽選はスムーズにいったので良かった。Vリーグ選手の協力も大きかったと思う。

配布にあたっては、やはり、メインイベントである、バレーボールの試合前に続々と来場するのでその時に特に集中的に配布したほうがよかった。2日目の午前中はほとんど来場者がなく、ひまな状態であった。観客席回収の際は、筆記用具を貸して欲しいといわれることが多かった。2日目は、回答デスクの鉛筆を増やしたが、回収員も携帯して貸せるようにできるとよい。

《2》 マネジメントセクション ショータイム委員会

1) 出演団体対応

チーフ 中村 玲 (医学女子)

●対応した出演団体

ショータイム部門: 応援団桐葉 (筑波大学チアリーディング部を含む)、Real Jam、Dance Association Seeds、日本橋ゴールドウィング、跡見学園女子大学体育会チアリーディング部 FAIRIES

セレモニー部門: 今宿太鼓、吾妻小学校マーチングバンド レッドウイングス 2003、竹園高校吹奏楽部

●実際の動き

応援団桐葉

普段は自分たちで遠征などについていき応援を行っている団体であるため、タイムスケジュールをしっかりと伝えさえすれば、当日の対応は特に必要ではなかった。演舞・エール交換以外でも筑波の応援を行うため、筑波大学の横断幕のある付近の座席の確保が必要。控室としてリフレッシュルームを設けたが、外で練習するため、あまり必要としていなかった。エール交換は、どの大学の応援団にも共通の理念のようなものがあるため、こちらから段取りを決めるのではなく、応援団同士で連絡を取って決めてもらうのが相手にとってベストであった。演舞では、楽器を自分たちで運ぶため、出入場口で待機中の選手を邪魔する恐れもある。

Real Jam

当日に雨が降ることを考えると、アップのための広い部屋が必要。リハーサル、当日のタイムスケジュールの確認をしっかりと行う必要がある。

DAS

小～中学生の大人数 (87人) の団体であるため、リハーサルは遅い時間にならないよう考慮する。また、出入場口までの移動時間などを代表者にしっかりと伝え、迅速に行動してもらう。

日本橋ゴールドウィング

東京の小学生の団体であるため、一週間前・前日のリハーサルは不可能。代表者との連絡を密に行う必要あり。当日朝のリハーサルが必要。

跡見学園

出演の決定が6月初～中旬と遅れたため、当日のプログラムの中に出演時間を設定するのが難しかった。東京の団体であるため、リハーサルなしの出演となった。代表者との連絡を密に行う必要あり。

今宿太鼓

オープニングセレモニーでの選手の出揃いのタイミングをきちんと考慮してくれたので、こちらとしては助かった。太鼓の搬出のタイミングを考慮する必要あり。出演料5万円は、「太鼓レンタル料」として申請する。社会人中心の団体であるため、前日リハーサルは遅めの時間に設定する必要あり。

吾妻小学校マーチングバンドレッドウィングス

バスやトラックでの送迎のを中心として、代表者との連絡を密に行う必要あり。

竹園高校吹奏楽部

代表者との連絡が非常に取りにくい、当日のタイムスケジュールの確認を中心とした連絡をしっかりと行う必要あり。出演の決定が6月初旬と遅れ、対応先が突然増えた状態となったこともあって、少々大変であった。

●反省点・問題点など

カピオは構造が変わっているため、出入場口までの移動経路が天気に左右されること、室内が土足厳禁であることが問題点として挙げられた。また、アップルームとして設けたリフレッシュルームが狭いこと、雨だと外でアップができないということも挙げられた。

仕事内容に関しては、人数的なことや人間関係などもあり、対応先のすべてを把握しているのがチーフ一人という状況であった。日程が迫るにつれて、セレモニー部の団体にまで範囲を広げたこと・アナウンサーや出入場口のトランシーバー係との連絡を密に行わなければならないことなどを考えると、はじめから経緯を分かっている人間がもう2～3人必要であった。それぞれの団体の対応係には、具体的なタイムテーブルを伝え、実行してもらうということで当日を乗り切ることができたが、次回のことを考えると、当日の対応を円滑かつ確実にを行うためにも初期の段階からの人数は必要である。また、当日の予期せぬ事態にも、ある程度は柔軟に対応できるようにするということが重要である。

ほかにも、イベントタスクなど、他のタスクの具体的な決定事項がないと動けない部分が多かった。対応先のことを考えると、ある程度伝えられる内容が明確にまとまってから、できるだけ少ない回数で連絡を取っていかねばならなかった。また、5～6月初旬はほぼ仕事がなかったため、他のタスクとの兼任も可能であった。

はじめは何から取り掛かろうかと手探りの状態であったが、アドバイザーの三木さんの協力もあり、順調に滑り出すことができた。他にも、随時相談に乗ってくれたスタッフの人々のおかげで、途中でめげずに最後まで仕事をやりぬくことができた。東西インカレのスタッフと関わったことには、本当に感謝している。

他のタスクの決定事項の兼ね合いを考慮しながら全団体の当日の動きを決める過程には苦戦したが、初期の段階から連絡を取り続けていた団体の人からは、自分たちも楽しむことができたとお礼の言葉をいただくことができ、やりがいのある仕事であったと思う。大

会を盛り上げてくださったことにとどまらず、実際に出演したことに対して喜んでいただけたということが何よりであった。

人との繋がりをはじめとして、東西インカレから得たものは大きい。今年成し遂げたことを土台として、個人的には来年もまた運営に関わってみたいと思う。

●ワーキングスケジュール

5月中旬 第一回学内団体ミーティング (Real Jam、DAS、応援団桐葉)

*依頼状・一次案 (出だし・終わり方などを記載) 配布、一週間前リハーサルの時間決め

6月初旬 第二回学内団体ミーティング

*一次案提出、その時点での決定事項の連絡

- ・竹園高校出演決定
- ・ショータイム委員会→出演団体対応へ

6月中旬 第三回学内団体ミーティング

*ポスター・チラシ・会場見取り図配布、各対応係紹介、レセプション参加人数・交通手段・セレモニーの人数確認など

- ・跡見学園出演決定

6月下旬 第四回学内団体ミーティング

*最終打ち合わせ (当日のタイムスケジュール配布、MD回収、パフォーマンス内容確認)

※学外団体には電話・文書で随時連絡

2) チアリーディング統括

奥寺 由紀 (㈱ウェブランディング)

2003年4月に、チーフマネージャーの松田氏から、産学官民連携の理念を持ったバレーボールイベントのショータイムの中で、チアリーディングの演技依頼を受けました。チアリーディングは、約15年前にアメリカから伝わった新しいタイプのスポーツであり、現在、東京・神奈川・大阪などの地域では盛んに行われています。チアリーディングの最大の魅力は、「応援する喜び(試合での応援)」と「応援される喜び(チアリーディング競技会)」を両方味わうことができることであり、元気に声を出すこと、体を大きく動かすこと、そして笑顔で演技をすることは、心身の健康に貢献します。

このような魅力を持つチアリーディングですが、現在、つくば市近郊における認知度は、ほとんど「ゼロ」に等しく、またチアリーディングをやってみたいと思っても、そのようなクラブチームがありません。そこで、私はつくば市でチアリーディングができる環境を作っていきたいと考えております。つくば市でチアリーディングチームを作り、「スポーツの街つくば」でのスポーツイベントに華を添えたい、また、チアリーディングは球技などのスポーツが苦手な女の子達にも楽しめるスポーツの選択肢になり得るのでは、と考えております。

今回の東西インカレ出演は、チアリーディングをつくば市の皆様に紹介できるよい機会となったと同時に、「全国規模の大学チャンピオンシップの「場」をより多くの人々で共有しよう！」という大会理念に叶うものであったと考えられます。

<出演したチーム>

- 1) 日本橋ゴールドウイング(33名)
東京、日本橋で活動している小学生のチアリーディングチーム
- 2) 筑波大学応援団桐葉チアリーディング部 (9名)
- 3) 跡見学園女子大学体育会チアリーディング部(13名)

<出演>

- 12日(土) エキシビジョンマッチ前 日本橋 GW
13日(日) 決勝戦前 筑波・跡見合同演技
セット間(1) 筑波大
セット間(2) 跡見大

<出演者の声>

◆日本橋ゴールドウイング

日本橋の子供たちにとって、東京以外の場所で演技をするのは初めての経験でした。出演したキッズチアリーダーは、総勢32名。一緒に来場した保護者が、20名でした。60人乗りのバスを一台貸し切りにし、朝7時に東京(日本橋)を出発。お昼前に演技を披露、その後はお弁当をいただき、エキスポセンターなどを訪れ、つくば市を観光しました。子供たちは、疲れた様子もなく元気に家まで帰った様子です。「つくば遠征」は、子供たちにとって楽しかった思い出となることでしょう。また、保護者の方々にとっても、普段足を運ぶ機会が少ない「つくば」という土地を訪れることができたのは、よい機会だったようです。

筑波大チア・跡見大チア

筑波大チアと跡見大チアは、バレーボールネットを境にし、同じ演技を披露しました。それぞれのチームが各大学内で練習を行い、はじめて合同で練習を行ったのは、本番当日でした。同じ曲で同じダンス、同じスタンツ(組体操技)を行うと、一瞬のうちにチーム同士の親近感が生まれました。演技後は、食事会で交流をし、楽しい時間を過ごしました。8月に参加するサマーキャンプ(3泊4日)やチアリーディングの大会などで再開できることが、お互いの楽しみとなったようです。同じスポーツをやっている者同士の交流を深めることは、そのスポーツの楽しさを倍増させるものです。また、お互いのチームがそれぞれの長所を学びあい、そして、自分たちの短所を知り、よい刺激となった様子でした。

<次回に向けて>

試合を見に来てくれた観客の皆様は、試合以外にも楽しんでもらう方法はいろいろあります。私が留学していたOregon State Universityでも会場を盛り上げるために、たくさんの工夫がなされていました。今後の参考のために、記載しておきます。

◆観客が参加するゲーム

子供たちによる、ふう船をおしりで割るゲーム

かなりかわいいので、盛り上がります。

子供たちによる、リレー

大学生のバレーボールのユニフォームを着る→走る→脱ぐ、というリレーです。

大きなユニフォームを着て、走りにくそうな姿がかわいいです。

大人による「ピザの箱」運搬ゲーム

デリバリーで使うようなピザの箱を10個くらい重ねて、運搬するゲームです。

ちなみに、ピザ屋さんは地元企業でスポンサーでした。勝つと本物のピザがもらえます。

◆Tシャツ投げ

声援が盛り上がっているところを目掛けて投げます。一番試合が盛り上がってきていると

きに行くと、会場がさらに盛り上がります。イベントのために作成した T シャツの在庫処分にもなります。

◆ピザプレゼント

T シャツ投げと同様に、声援が盛り上がっているところに手渡します。T シャツは、観覧席対象、ピザは、フロア席対象といった感じでしょうか。

◆マスコット

マスコットが会場にいと、子供たちはとても喜びます(例 NEC のロケッツ君)。応援を盛り上げたり、子供たちと写真をとったりと、大活躍です。

しかし、あくまでもこれらは会場を盛り上げるための「プラスα」です。バレーボール選手による見事なプレー、そして、今回のように地元の筑波大学が逆転優勝をするという試合内容に、観客の皆様は大満足だったのではないのでしょうか。今後も、地域の方々に「スポーツをする楽しさ」「見る楽しさ」を伝えていく活動に貢献していきたいと考えております。

3) 各出演協力団体より

1. Dance Association Seeds 林田 祐樹

『産学官民連携』をコンセプトに、たくさんの人たちが自主的に関わってつくりあげた素晴らしい大会だったと思います。組織の作り方やスタッフの動かし方等、DAS としても勉強になりました。1 回きりで終わってしまうのではなく、継続することが重要だと思うので、是非続けていってほしいと思います。

反省点

会場を整備する係りが必要

→危険防止等、会場マナーの徹底、観客のモラルも育てる

子供のファン層の獲得

→子供の観戦が少なかった、競技人口の底辺拡大

当日の運営に関して、もう少しシミュレーションが必要

→共通理解の徹底、運営の迅速化、選手や出演者の安心感につながる

出演団体に対してのフォローの充実

→子供の充実感アップ、一緒に大会を作っているという意識の徹底

2. 竹園高校吹奏楽部 顧問教諭

出演してみたの感想

地域振興の一環でもある今回の大会に参加させて頂き、少しでも地域の役に立てたのをとても嬉しく思います。

しかし、出演依頼が来たのがわりと急だったので、準備期間が短く大変でした。

文化部ということで、普段あまりスポーツに関わる事のない人が多く、あれほど近くで生のプレーを

見る事が出来たのはほとんどの人が始めてで、とても貴重な経験でした。

良かった点

演奏スペースが搬入口からとても近く、楽器の運搬が楽だったこと。
コートに近いので、迫力のある試合がみることができたこと。

注意すべき点

演奏スペースが狭く、少し演奏しづらかったこと。
ボールが飛んでくるため、楽器に当たったりしてとても危険だったこと。
音出しや楽器のケースを置く部屋を用意していただきかったこと。
会場に入るタイミング、演奏するタイミングなどの打ち合わせは、前日などもっと早くにやるべきだったと思います。当日の午前中では、お互い把握しきれない部分があったと思います。

今後のこと

演奏の機会を頂けるのはとても嬉しい事なので、ぜひ参加してみたいです。しかしその時は、いくらスタッフの方にガードして頂いても楽器が危ないので、少しでも対策を取っていただけたらありがたいです。

3. 筑波大学応援団桐葉 佐々木 通年

仕事内容

大会当日

7月12日(土) 12:00～ エール交換

筑波大学応援団桐葉、法政大学応援団の2校で行った。この2校以外は応援団が来なかったため、交互

にエールを行い全5校にエールを送った。

7月13日(日)

12:00～ 演舞

演目:筑波大学応援歌、つくばおろし

「筑波大学応援歌」は応援団桐葉三部(リーダー部、チアリーダー部、マーチングバンド部)による演舞、

「つくばおろし」は応援団桐葉リーダー部のみによる演舞。MC(演舞中の司会)は団員が行った。

優勝決定戦前・セット間 チアリーダー部

応援団桐葉チアリーダー部と跡見学園チアリーダー部とで行った。

次回への展望

〈エール交換〉

応援団のエールには、特殊な形式・儀礼が存在するので各参加応援団同士で交渉を行うのが良いだろう。

エール交換に関しては、応援団桐葉が(来年以降もつくばで開催されるのなら)出場校への直接(東西インカレへの参加要請、エール交換の依頼、エールを行う順など)の方が混乱せずスムーズに行えると思う。

また、今回は15分の枠内で行ったが、もし5校とも応援団がきていたら時間が足りなかつただろう。というのも、エールはほぼどの応援団でも「母校校歌→エール」という形式がとられる。今回は2校分の校歌+エールの時間で約15分となったので、参加する大学にもよるが、もう少し時間があれば良いと思う。

〈演舞〉

特に問題はなかった。雨のため、細い通路を通るのに時間がかかったり、アリーナ外で選手の邪魔になつたりして開始時間が少し遅れてしまった。しかし、晴れていれば問題はなかったと思われる。

〈チアリーダー部〉

省略(奥寺さんの報告書を参照して下さい。)

感想

初の企画ということで、こちらも戸惑うことは多かつた。しかし、実行委員の方々の協力もあり大きな問題

もなく無事終わることができた。エール交換、演舞、チアリーディング、試合中の応援と、多くの場面に参加させて頂いたが、微力ながらこの東西インカレの成功に貢献できたのではないかと思います。

最後に

選手、各実行委員の方々、本当にお疲れ様でした。このような大きなイベントに参加することができて団員一同感謝しています。来年以降もぜひ協力していきたいと思いますので、よろしくお願いします。

4. 跡見学園女子大学体育会チアリーディング部主将 飛田 淳子

今回の東西インカレ出演は、チーム一人一人が改めてチアリーディングという競技の楽しさを感じ取れるものであったと思います。他大との交流がほとんどなかった私たちにとって、合同演技という今回のお話はとても新鮮なものでした。筑波大学さんとは、本番当日初めて顔を合わせ、演技も一度限りで、大学で練習していったように上手く出来ず、悔しかった面もありました。しかし、そういった悔しさや、ひとつのフロアで共に演技をする喜びを分かち合う事で、お互いの心が通いあえたと思います。2色のユニフォームで、同じダンスをし、同じスタンスを見せる喜びを知りました。お互いのことを知ると、自分達のチームの良い所・直さなくてはならない所を学ぶことができ、良い刺激が得られました。

普段、スポーツ応援をしていない私たちのチームにとって、バレーボールの試合自体観戦する機会も少なく、筑波大学チアリーダーをはじめとする、応援団や観客の皆様と共にスポーツ観戦(応援)に燃え上がり、熱くなれたのもとても良い思い出になりました。私たち上級生はもちろん、大きなイベントが初めてだった1年生にとっては特に、感じる事・吸収する事が多かったのではないかと思います。スポーツの素晴らしさを肌で感じられ、チアリーディングの魅力に改めて気付かされました。今回の出演は、私たちを、大きく成長させてくれるものであったと思います。

5. 日本橋ゴールドウイング 代表 倉本

ゴールドウイング概要

東京都中央区日本橋を拠点とし、チアリーディングの技術を習得する事を目的とする。
入会資格は小学1年以上で、現在39名の小学生が会員として活動している。
中央区主催の諸行事への参加、チアリーディング協会主催の大会等に出場している。

タイムスケジュール

- 7:00 集合(日本橋小学校前)荷物チェック後出発
- 8:40 筑波カピオ到着(すぐに着替え、リハーサルまで待機)
- 9:00 リハーサル(リハーサル終了後ユニフォームに着替える)
- 10:30 開会式(保護者はスタンド席にて見学)
- 11:05 演技開始
- 11:15 演技終了(着替え、移動の準備)
- 11:45 エキスポセンターに出発(バスにて10分)
エキスポセンターにて昼食後自由行動
- 13:30 ミュージアムパークに出発(バスにて45分)
到着後自由行動
- 16:30 集合後帰路につく
- 18:00 日本橋小学校前到着

会計報告

収入	支出
参加費およびお弁当代(追加分) 34,000 円	貸し切りバス(大型) 84,315 円
	高速代 9,200 円
	運転手さんお礼 5,000 円
	子供おやつ代 6,000 円
	お弁当追加分 9,500 円
	エキスポセンター 8,400 円
	ミュージアムパーク 11,740 円
34,000 円	134,155 円

差し引き、100,155 円は、ゴールドウイング会費*より充てる。

※ 後日「インカレ実行委員会」より支払いが完了した。

反省点及び感想

年に3回ほど、代々木体育館における大会には出場しているが、それ以外の発表の場はグラウンドなど屋外が多かったため、リハーサルでは立ち位置の感覚が異なり、戸惑っている子供たちも多かった。リハーサルをするために早朝出発となったが、結果的にはいろいろ確認することもでき、本番に備えることができたので良かったと思う。

また、4月に入会した1年生にとっては初めての舞台となり、8月のジャパンカップに向けての良い経験になったようだ。

午前中に演技を終えお弁当を頂いた後、エキスポセンターなど普段訪れることがあまりなかったところに、会の親子全員で一緒に見学できたことは楽しい思い出となった。見学中は、上級生と下級生が一緒になるような班構成でまとまって行動をし、5・6年生にとっては上級生である自覚ができた良い機会だった。

大学生のスタッフの方にきちんと挨拶するように言っていたが、声の小さい子供が多い。どんなときでも元気に挨拶ができるよう、今後も指導したい。

6. 吾妻小学校マーチングバンドレッドウイングス 2003 顧問教諭

経験としていいとか悪いとか、初めてのパターンなので何とも言えませんが、少なくとも新年度で結成し直したバンドの子供達にとっては、貴重な体験になったようです。緊張感で人は成長していきますから。

今、コンクール(県大会)の練習も追い込みの段階なのですが、新入部員にとっては、人前で演奏するいい機会でしたし、それが以後の出番の役に立っています。これからもタイミングのよい機会であれば出演させたいと思いました。

《 3 》 マネジメントセクション バレーボール委員会

1. エキジビション部

チーフ 箱守 寛子 (医学女子)

- 取引先：つくば市バレーボール連盟
- 予算・決算：なし
- 作成物：タイムスケジュール、必要人員・物品リスト、案内状（70部）
- ワーキングスケジュール
 - 5月下旬；つくば市バレーボール連盟にエキジビションマッチの依頼
 - 6月上旬；試合進行内容の決定、パンフレット原稿作成の依頼
 - 6月下旬；選抜メンバー決定、タイムスケジュールの決定
 - 7月1日；チーム決定、当日の動きの報告・確認
 - 7月10日；案内状作成
- 人員：当日までの作業；2人で可能、当日誘導；2人
- 東西インカレを通して
 - ・当日は連盟の方が会場を熟知していたこともあり、自主的に動いてくれ、助かった部分が多かった。また、大人数であったが、皆さんが大変協力的で、スムーズに進めることができた。
 - ・エキジビションマッチがプログラムの最初のほうで、観客が少なく、外の盛り上がりには欠けていたように思う。
 - ・誘導と他の担当の仕事が重なってしまい、最後まで誘導することができなかった。
 - ・大会前日にネットの幅が足りないという問題が出たが、連盟の方が迅速に対応してくださった。
 - ・家庭婦人部はもともと体育会のバレーボール部などが各チームの指導にあたっていることで関わりがあったが、今回、筑波大全体として関わり、つくば市のバレーボールを広めるに当たっても、関係を深めることができ良かったと考える。
 - ・エキジビションマッチでは、いつもは敵であるチーム同士が同じチームで戦うことで、新たなつながりができたのではないかと考える。
 - ・今回、スタッフの一員として大会に関わり、成功を修めることができ大変良かった。しかし、準備の段階で、時間の余裕がなく、個人の負担が大きかったように思う。また、個人差も大きかったので、もっと明確で、細かい分担が必要だったと思う。そういった部分を改善して、またやってみたいとは思っている。

2. 交流部

チーフ 熊谷 優 (体育男子)

交流会に来ていた子供たちの顔を見ていると、どの子も輝いているように見えた。普段とは違う場所でたくさんの友達と、また多くのスタッフや偉大な先生に少しでもバレーを教わることが出来たことは彼らにとっていい思い出になっただろう。こういう機会がほとんどなかったこともあり交流部としては嬉しい成果が挙げられたと思う。やっていて自分も楽しかったしまたやりたいとは思っているが、今度はもっと広い場所でネットも使ってもらえればなお良いと思う。

出会い

交流会に来てくれていた生徒たちと話をすることで仲良くなったり、スタッフ同士の繋が

りもでき、何かと出会いはあった。また、ママさんバレーの皆さんや、連盟の方々ともある程度の繋がりは出来たと思う。

進行

問題なかった！実際、スタッフも予想以上に動いてくれたし、連盟の方々もかなり動いてくれたので円滑に進行したと感じている。ただ、一つ気になったのは、コートが狭すぎて十分な指導スペースがなかったことだ。

トラブル

特になし。唯一は遅刻者がいてみんなの輪に入れず、入り口で泣いていた女の子の対応が大変だった（慰めて機嫌をとるのが）。

次への展望

交流部としては内容をもう少し濃くするかもしれない。もしくはこのままで十分よいのではと感じた。理由は、子供たちにとっては練習の時間がいつもより長かったらしく少し疲れた子達もいたらしい。しかし、やり足りない子もいるため、その境界が難しく、今回のような感じでよいのではということである。あと、全体で言うと、ママさんのエキジビションは失敗では？と言う声もあった。理由は、その最中に客がほとんど帰ってしまったから・・・らしい。あとはそこそこ成果はあったのではと言う感じ・・・。

3. つくば市バレーボール連盟

会長 石黒 澄子

エキジビションについて

半強制で各チームより選抜し1回の合同練習のみで当日臨みました。やってみて他チームとの交流は楽しかった様です。

ボールリトリーバー6人制を両日とも5組30名ずつ都合がつく人を募りました。間近な要請にもかかわらず、参加協力があり、実施することができました。参加者は心地好い緊張を味わい楽しんだようです。担当セット以外は観戦することができ良かった。

事前打ち合わせについて

時間感覚が学生の感覚で、社会人には冗長を感じました。

当日人員点呼など、学生スタッフ側（それぞれの担当）と、連盟とで重複が多かった。

学生の皆さんの綿密な計画、そして臨機応変な行動に敬服しました。ただ女子バレー部の関わりが無かったことが気がかりました。

※なにはともあれ無事終了し、良かったと思います。全てにおいて皆が一生懸命に関わり良い物に仕上がりました。そして、参加することの意義を実感したと思います。ただ、時間に余裕の無い中での要請、そして変更と、振り回された感がありました。次回は早めの行動及び決定が不可欠と思われます。特に周知のためのチラシ等は他団体の大会等に配布ができます。今回、何らかに関わった人はもちろんですが、観戦のみの人達からも次回を楽しみにしているという声を聞きました。この言葉からも大成功であった事がうかがえます。

《 4 》 マネジメントセクション レセプション委員会

チーフ 中村 美春 (医学女子)

式次第について

- 18:30 開場
- 19:10 開会の辞 筑波大学体育専門学群長 高橋健夫 挨拶
 つくば市長 藤澤順一 挨拶
 つくば市議会議長 兼平英雄 挨拶
- 乾杯(つくば市教育長 藤井伸二)
- 懇親会
- 筑波大学出身Vリーグ選手紹介(都澤凡夫による)
- 代表 加藤陽一選手 挨拶
- 20:20 ダンスパフォーマンス(出演 筑波大学体育会ダンス部)
- 20:30 懇親会
- 21:10 閉会の辞 全日本大学バレーボール連盟副会長 朽堀申二 挨拶

制作物

チケット

レセプション会場吊り看板

レセプション会場エントランス看板

捨て看板

個人用プログラム

予算・決算

169,935 円の黒字を記録！詳しくは別紙参照。

ワーキングスケジュール

前日まで

5	28	水		6	20	金	東雲看板デザイン締切
	29	木			21	土	
	30	金			22	日	
	31	土	招待状返送締切		23	月	
6	1	日			24	火	
	2	月			25	水	
	3	火			26	木	
	4	水			27	金	
	5	木		7	28	土	
	6	金	東雲とのミーティング		29	日	
	7	土			30	月	選手名簿作成
	8	日	スタッフ、招待客名簿作成		1	火	
	9	月	レセプションチケット作成		2	水	個人用プログラム作成開始、一般参加受付締切
	10	火			3	木	アナウンスミーティング、一般参加者名簿作成
	11	水			4	金	東雲とのミーティング、一般参加者チケット発送
	12	木			5	土	
	13	金			6	日	
	14	土			7	月	捨て看板作成開始
	15	日			8	火	アナウンスミーティング

16	月		9	水	
17	火		10	木	当日要員ミーティング
18	水		11	金	
19	木		12	土	レセプション当日

当日

日	時間	スケジュール	タスク	担当
	15:30	レセプション委員東雲集合 ダンス部、アナウンスリハーサル		
	17:45	スタッフ全員東雲集合 スーツに着替える		
	18:30	受付開始	招待客・選手 スタッフ 一般参加者 当日参加者 荷物管理&会場奥出入り口	中村美春 久慈正太郎 影山あき子 松山理美 藤澤寛子 杉田かおり 大城聡香 田中裕子 平本芳行 齋藤郁 古内ひとみ
	19:10	レセプション開始		
	20:00	受付終了	受付残存組	中村美春 杉田かおり
	20:35	受付残存組チェンジ	受付残存組	大城聡香 白柳友季子
	21:10		荷物引渡し	中村美春 杉田かおり 藤澤寛子 影山あき子 大城聡香

意見・感想

今回のような大きなイベントの運営は初めてで、全て手探りだったということもあり、大会直前まで仕事に追われてバタバタしてしまいました。このことはレセプション委員全員の反省点として一致したところです。もっと計画性を持って仕事を進めたかったです。しかし、レセプション会場しか決まっていない状態で、このイベントの成功を収められたことは、いろいろな意味で自信になりました。何度もミーティングに参加していただき、アドバイスをくださった東雲の野口さんのお力も非常に大きかったと思います。

当日販売についてですが、予想通り多くの方々に来ていただいたことはレセプション成功の大きな要因でした。しかし、受付で当日販売のみ混雑してしまい、スムーズな対応ができなくなってしまったのは問題だったと思います。以前から東雲の方にも当日販売はできるだけ避けた方がいいとアドバイスをいただいていたのですが、その言葉の意味を実感しました。

レセプションは大会全体を見ると少し別格なところがありましたが、東雲やダンス部だけでなくクリエイターや販売促進部など様々な委員との繋がりをもてたことは大会成功の鍵であっただろうし、この大会を通して実感できたことです。

人員について…今回4人で進めたのですが、レセプションを企画する上ではちょうどいい

人数であったと思います。しかしチケットや招待状、個人用プログラムなど制作物を作るには非常に少ない人数で、それが徹夜になることが多くなった原因であったと感じます。来年について…今回の大会に関われたことで勉強になる部分が多く、運営に携われたことは全く後悔していません。しかし、実際犠牲になってしまった面もあり、特に学業に関していうと、運営の期間は納得できないものになってしまいました。はるさんを除く3人は来年4年生になり、自分の将来に向けてのことを進めていかなくてはいけない時期になります。来年全般的に運営をしていくことは難しいと思いますが、前日や当日などで手伝えることがあれば協力したいと思います。

《5》 クリエイティブセクション オフィシャル

1. オフィシャルクリエイター

倉本 大資 (芸術専門学群)

小澤 宏行 (芸術専門学群)

佐々木 絵理 (芸術専門学群)

八日市屋 隆 (芸術専門学群)

1-1. 概要

各セクションより依頼される各種制作物のデザイン、版下制作。制作物に関して実際に製作する立場としてのアイデア、意見提出。

1-2. 仕事内容

①他セクションより制作依頼を受け、他セクションの担当者と

- ・制作物の媒体 (ポスター、看板、チケット、等)
- ・制作方法 (印刷屋で印刷、プリンターで出力、賞状用紙にプリント)
- ・どのような意図で製作するか (制作物の目的、配布方法)
- ・締め切り

などについて依頼受付、相談。

②クリエイター内でどのような方針で製作するか相談、実際のデータを誰が製作するか決定。

③クリエイター間でチェックしあいつつデータ制作。

④他セクションの担当者にチェックしてもらう。

⑤入稿、もしくは他セクション担当者にデータを渡す。

1-3. 人員

東西インカレ実行委員会のスタッフとして常時関わっていたのは、小澤 (芸術専門学群 視覚伝達デザイン専攻)、倉本 (芸術専門学群 総合造形専攻) の2人。他制作サポートは常時1人~2人が入れ替わりで手伝っていた。また、人手がいる作業 (今回の場合、大会横断幕の穴あけ加工・パンフレットの訂正シール貼り) はインカレ実行委員と芸術専門学群の人に声をかけ、集まってもらい作業した。

1-4. 制作環境

制作の内容的にこまめな相談が必要だったこと、締め切りが短い制作が多かったことから、ノートパソコン、デスクトップパソコンを学校に持ち込み、基本的にはクリエイター

が同じ場所に集まって作業した。最初は芸術専門学群棟の視覚伝達デザインの部屋で、6月なかばに制作物が増えてからは、24時間出入りできるバレーボール研究室、会議室で作業した。

1-5. 制作機材

・パソコン

PowerBookG4（小澤個人所有）

iMac（倉本個人所有）

PowerBookG3（倉本個人所有）

PowerBookG4（都沢先生）

iBook（東西インカレ実行委員会）

・スキャナ

canon N656U（倉本個人所有）

・プリンタ

バレーボール研究室のプリンター

都沢先生の研究室のプリンター

・ソフトウェア

adobe Illustrator 8.0

adobe Illustrator 10.0

adobe photoshop 7.0

これに加え、クリエイターの手伝いをしてくれた人でノートパソコンを持っている人は各自、自前のパソコンで作業。5月なかばの制作開始時は PowerBookG4、PowerBookG3 の二台しかなく人手はあってもパソコンがない状態。また現状では印刷会社への入稿は Illustrator8.0 にて製作したデータが基本であるため、Illustrator10.0 で製作したファイルは一度 Illustrator8.0 で開きデータを直した。

2. 各制作物に関して

ポスター、チラシ、パンフレット、サブパンフレット、横断幕、大会会場用看板、レセプション会場用看板、Tシャツ、タオル、レセプションチケット、パンフ引換券、お弁当引換券、賞状各種

制作物の媒体（紙・布、等）、色数（1色・4色フルカラー・ベタ塗り4色、等）、制作技法（オフセット印・シルクスクリーン印刷・ペンキで手書き、等）、これらの製作技法に関する事は、表現できること、表現の方法にもかかわることであり重要であるが、製作会社と直接話さなかった物もあり、製作技法にあった表現が出来ていない部分がある。

2-1. ポスター、チラシ

岸川（芸術専門学群 視覚伝達デザイン専攻）に依頼。この時期は小澤、倉本が大会コンセプトを理解しきれておらず、大会コンセプトがポスターに表しきれていない。4色オフセット印刷で制作されることがわかっていたため、製作技法に関しては問題なし。

2-2. パンフレット

今回の制作物のなかで一番時間がかかり、制作日程がつかまっていたため大変だった。小野さんのおかげで、やりきれることが出来たと思う。小澤、倉本以外に常時助っ人を頼み制作。パンフレットセクションとは企画の段階より密に話し合っていたので、セクション間のすれ違いはなし。印刷会社とも話したのでデータ制作に関する問題もなかった。フルカラー100p というボリュームの冊子は製作したことがなかったため、作業量の把握が出来

ていなかった。よって日程の立て方があまく、締め切りに追われた。

2-3. サブパンフレット

パンフレットと印刷会社は同じなので、データ制作に関する問題はなし。サブパンフレットセクションとは、あまり話し合いが行われず、企画段階では話し合いがなかったため、クリエイターが制作段階になって、サブパンフレットの各担当者が原稿を持ち込みはじめから、相談しながら制作。作業と相談が交互に行われたため、効率はよくなかった。

2-4. 横断幕

横断幕担当者、制作会社とも話したので問題なし。締め切りは余裕あり。

2-5. 大会会場用看板

制作会社との打ち合わせはなし。よってどのような方法で看板をつくるのかわからなかった。

2-6. レセプション会場用看板

制作会社との打ち合わせはなし。よってどのような方法で看板をつくるのかわからなかった。

2-7. T シャツ、タオル

製作会社と直接話さなかったため、製作技法に関して不明なまま製作。データの入稿方法も同じく。紙に印刷するポスターなどと異なり、布に印刷する方法はいろいろあるため、どのような方法で製作するのかわからないと、技法にあわない間違った表現をしてしまうことになる。T シャツ全面のグラデーションのかかった文字は失敗。技法がわかっていたら、同じグラデーションのかかった文字でも違った表現が出来たと思う。

2-8. 各種チケット類

バレーボール研究室のレーザープリンターで製作したので、問題なし。

2-9. 各種賞状

文面、製作枚数など訂正が相次ぎ、無駄に作り直した。そのため、ぎりぎりになって、賞状用紙を買いに走り回るはめに。

2-10. 撮影

大会の記録をデジタルビデオカメラ 2 台で撮影。

撮影の段階ではビデオ編集の計画がたっておらず、ただ撮影した。

人員が足りなかった、一台のカメラに一人だと、撮り続けなければならないので休憩もとれず大変だった。

2-11. ビデオ編集

撮影が無計画に行われたため、後のビデオ編集がやりにくかった。

先に大会終了後にどのようなビデオを作るか考えて、必要な映像を撮影する必要があると思う。編集に iBook を使用したが、パワー不足かつハードディスク不足。

3. 音響

3-1. 仕事内容

大会当日のマイク、BGM などのミキサー操作。

3 - 2. 実際の作業の流れ

- ①前日まで ー BGM の選曲。
- ②前日リハーサル ー 大会プログラム中の音入れのタイミングを打ち合わせ。アナウンサーと各出演団体と打ち合わせ。
- ③当日準備 ー カピオの人より音響機材の使用法を聞く。
- ④1 日目大会進行中 ー プログラム進行に従って各出演団体と音だしのタイミングを再チェック。ミキサー操作。
- ⑤1 日目大会終了後 ー 数団体リハーサル、音だしのタイミングの打ち合わせ。
- ⑥2 日目大会進行中 ー プログラム進行に従って各出演団体と音だしのタイミングを再チェック。ミキサー操作。

3 - 3. BGM、音響操作が必要な箇所

BGM を用意した箇所

- ・客入れ・客だし
- ・各プログラム間
- ・試合ー選手入場～公式練習。
- ・試合ーセット間

ダンスパフォーマンス・チアの音楽は各出演団体が用意。

- ・出演団体に「音出し係」がいる場合、機材の使用法を教える。
- ・出演団体に「音出し係」がいない場合、音だしのタイミングを打ち合わせし、当日のミキサー操作。

3 - 4. 反省

- ・前日になりアナウンサーの方々と初めて顔合わせを行った。アナウンサーとの連携が多いので事前に顔合わせだけでも行っていたら、当日のアナウンサーとの連携もよりスムーズに進んだのではないかと思う。
- ・僕自身がバレーの大会を知らなかったため、「セット間に BGM を流す」など知らなかった。BGM の選曲に関しても、どんな音楽が流れているかのイメージがわからなかった。しかし大会自体が「バレーだけ」という今までの大会とは違う物であったのだから BGM の選曲は自由であってよかったと思う。
- ・出場チームに 1 曲テーマソングを選んでもらい、試合の入場やセット間に流すのもいいと思う。

3 - 5. 感想

- ・当日は仕事は、出演団体の音だしはタイミングが重要なので緊張感のある仕事だったが、一度音

4. 問題点

4-1. 制作日程

パンフレットの制作日程の立て方が甘かったため、締め切りに追われた。そのため他の制作物もパンフレットの制作の合間をぬって制作することになってしまった。パンフレットの制作終了後、大会直前になって色々製作する物がでてきたため、大会ぎりぎりまで忙しかった。

4-2. 制作のながれ

他セクションの担当者が製作会社と話をし、クリエイターに制作の依頼をしていたため、製作技法、データの入稿方法がわかりにくかった。他セクションの製作会社と話す人間がデータ制作、製作技法に関して何もわかっていないので、話が間接的になり分かりにくくなっていた。クリエイターセクションから、制作のことがわかっている人間（芸術専門学群の人など）を製作会社と話をするためだけの役割で用意できたら良かった。

また他セクションは制作物に関して好き勝手に考え、頼んでくる部分も多く、実際のデザインやデータ制作、製作技法を考えていないので、その点のやりとり、デザインがしにくい面もあった。版下制作だけを頼むなら、お金はかかるが外部のデザイン制作会社に外注するほうがいい。ギャラがでないのだからこそ、ディレクション、デザインを自分達でできることが芸術専門学群の学生にとっては魅力的だと思う。

4-3. 人員

ぎりぎりの日程だったため、常に3~4人のクリエイターではきびしい。時間がない＝アイデアを練れない・細部まで手が行き届かない。また芸術専門学群の学生は日常的にギャラが出る仕事をしていることも多いので、ボランティアで学生を多く集めることはむずかしい。今回は、常時実行委員会に関わっているのは二人で、仕事を少しずつ多くの人に頼み手伝ってもらった。ボランティアでの学生の集めにくさは仕事の量が増えれば増えるほどである。

4-4. ギャランティに関して

何かしらお礼があった方がいいとおもう。まったくなしだと”できる人”を集めにくい。

5-1. 全体的反省

- ・制作日程はもっとゆるく組まないと、間に合わせでの制作になる。
- ・制作日程が今年の状態でもっと細部まで考え製作するなら人手は常に6人は欲しい。(制作期間が1か月のびれば人は増やさなくても大丈夫)
- ・制作物の企画の段階からクリエイターと各セクションで意見交換をすることが必要。(製作技法、制作コンセプト、製作目的の共有の為)
- ・クリエイター班にスケジュール管理と雑務を行うマネージャーがいたら楽。(制作に集中できる)
- ・クリエイターは基本的にはバレーがわからない。バレーについての知識も多少は必要。
- ・クリエイター班の人はバレー関係者でないため、バレー部の人と同じ扱われ方はオカシイという意見も。

5-2. 個人的感想

小澤

個人的にはやってよかった。それにつきます。制作物について反省もいろいろ事細かに切りがないほどあるけれど、やりきれて良かった。日程と人数の割にはよく出来ました。

倉本

みなさん本当にお疲れ様でした。とてつもない日々でした。

最初の話のときからからさうとう厳しいスケジュールだったと思い出されますが、何とかなるっしょと思ってやってみたら何とかなったけど結構大変でしたが、楽しくお仕事できました。まとめ役の小野さんには本当にお疲れ様でしたといたいです。

6. バナー掲示物について

1. 作業内容

企業より送られてきたバナーの会場内掲示。

2. 実際作業の流れ

各バナーのサイズを測る。

事前にカピオの下見をしバナーをどこにどう掲示するか打ち合わせ。

掲示場所がガラスの手すり、ひもを結ぶ場所が少なかったため、掲示方法を試行錯誤。

両面テープで掲示することに決定。

前日準備時に、バナーの取付け。

大会終了後、取り外し。

3. 掲示方法

掲示の順番はスポンサーのランクによった。

バナー掲示状態の見た目の良さも考えられたが、両面テープだけでは、完全には固定できないのでひもと併用。

カピオ内のバナー掲示場所は 2 階のアリーナ席の通路部分のガラスの手すり。観客が触りそうな場所だったので、バナーがはずれて落下しないよう気を使った。片側は柵があり、両面テープとひもで固定。もう一方は柵がなく、ひもで固定できない為、両面テープではりつけ、バナーの落下防止に部分的にひもを手すりに固定した。

4. 問題点

某社のバナーが素材の関係上、両面テープで固定できず、建築用強力両面テープを使ったら、バナーにテープがのこってしまった。

結局、ひもを併用したため、見た目にはよくなかった。

2. オフィシャルアナウンサー

片上 知恵 (体育研究科)

国川 聖子 (体育研究科)

斎藤 暁子 (体育専門学群)

須賀 慶 (人間学類)

青木 千佳 (人間学類)

仕事内容 (司会進行アナウンサー)

当日まで

アナウンス原稿作成

試合進行用

諸注意

イベント進行用

各団体対応との打ち合わせ

各団体との直接打ち合わせ

大会当日

当日のアナウンス進行

その他

会場設営の手伝い (前日の販売ブースの設営、いすの出し入れ他、荷物の搬入搬出)

仕事内容 (サポート)

試合進行

大会当日

合同練習前、合同練習時

メンバー表、スターティングメンバー表の確認

レフリーの変更の有無→変更がある場合には、名前の確認

レフリーと試合開始の笛のタイミングを確認

試合中

選手交代の際に、背番号と選手名の確認→用紙に記入（またはメンバー表を指し示す）

タイムアウト時、大学名とタイムアウトの回数→用紙に記入（または指し示す）

反省

アナウンス原稿作成にあたって、ルールなどバレーボールに関する知識が全くなかったのだが、事前に頂いた資料と担当との打ち合わせにより、当日困らない程度にはマニュアルを作ることができたと思う。

当日はアナウンス中心に全ての進行が行われるため、かなり時間的に余裕がなかった。プロトコールに当日変更があったりしたが、このような変更内容が試合進行とサブイベントとで仕事分担ができていたため確実に把握できるメンバーで進行できたので良かった。

ショータイムについては、リハーサルを前日に綿密に行えたので、進行がスムーズにできた。

決勝戦前のチアの演技時間と回数について、運営側とチアの方との間に認識の違いがあった。リハーサルで確認できたので良かったが、運営側で各団体の演技内容時間について、最終確認を大会前に行う必要があると思う。

流れをつかめていない部分も多少見られたので、ただ原稿を読み込むだけでなく進行をする仕事である認識を入れ、今後進めていくべきだと感じた。

サブイベント等で担当者の把握していない部分が多く、また、連絡を誰にとるかの所在もはっきりしていなかったのは打ち合わせ等で障害になった。

アナウンスの役割が、ただ原稿を読むだけなのか、それとも全てを把握し連絡をとるところまで行うのか、アナウンス担当者の中にも認識のずれがあったと思う。アナウンスが進行をつとめるといふものならば、事前にもっと運営に関わっていくべきだと思う。団体対応とアナウンスとの連携、競技担当とアナウンスでの時間配分の打ち合わせをもっとしっかり行っていく必要性を感じた。

ミニイベントごとにリーダーを立て、その人の仕切りにより計画を進めていくと良い。

本番はもちろん、打ち合わせの進行に関しても、担当イベントに関することは全て把握できているリーダーの存在が必要だと感じた。そうすることで、全員が共通の完成イメージを描くことができ、それに向かってそれぞれがすべきことに責任が持てるようになるのだと思った。

感想

今回のような大きなイベントでアナウンスという進行上大切な仕事に携わらせて頂き、私自身大変勉強になりました。

この仕事を引き受けたときは、正直、ただ与えられた原稿を読めばよいのだろうと、かなり甘く考えていました。しかし、仕事は原稿作りからスタート。バレーボールの試合すらなんとなくしか見たことのない私にとって試合進行の原稿作りは思ったより苦戦しましたが、原稿を作りながら、また試合のビデオを借りてみたりする中で、試合当日のイメージが自分の中で広がり、その分とても楽しみに当日を迎えることができました。数少なく出席した全体ミーティングでは、多くのスタッフのみなさんが一から手作りでこの大会を企画・運営していることが実感され、アナウンス部門もより良いものにとの思いで、主体的に取り組むことができたと自分では満足しています。

仕事の充実感、達成感はもちろんですが、一番感動し思い出に残っているのは、やはり一番近い本部席で全試合を見られたことです。メンバーチェンジやタイムアウト等の慣れないアナウンスのために、各校のベンチや審判の合図など普段と違う視点から試合を見て

いると、素人ながら各チームの状況や攻防のかけひきなどこれまでに感じたことのないバレーボールの魅力を体感することができました。

カピオでの密度の濃い3日間は今思うと夢のようです。これを機に、私のスポーツの楽しみ方は大きく広がりました。また、このようなイベントを通してより多くの方がスポーツのおもしろさを体感し、共有できる機会を創っていけることはとても素晴らしいことだと思います。

この大会がまたパワーアップして引き継がれることを祈念して…。

スタッフのみなさん、本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございました！！

お疲れ様でした！！

良かった点はやはり、伝統の筑波バレー部に関するイベントに携われたこと。その一員として参加できたことは、筑波での最高の思い出の一つになることと思います。

反省点はあまり準備に参加できなかったという点。研究と時期が重なり、なかなか予定が組めませんでした。すみません。

《6》 クリエイティブセクション グッズタスク

1. アメニティグッズ部

チーフ

林 宏樹 (体育男子)

仕事内容・グッズ販売までの流れ

当日まで

〈初期案〉

-予算について-

切り詰め版

- ・Tシャツ 1000円×350本=350000円
- ・タオル 1000円×100本=100000円
- ・その他(ストラップ) 未定

合計 **450000円**

理想版

- Tシャツ スタッフ用 1000円×100枚=100000円
- 販売用 2100円×250枚=525000円
- ・タオル 1000円×100本=100000円

合計 **725000円**

-売り値-

Tシャツ 2500円 , タオル 1200円

ママさんバレーのチームやバレー部、医学バレー部など、事前に注文を聞けるところには前売りという形で安めで販売する。

6月1日

制作会社関連

Tシャツの制作会社はスポンサーの関係で決まってくる。

今のところアシックスがゴールドスポンサーに決まり、あとはRight Onしだいで決まる。

タオルはアシックスで制作することにほぼ決定。

その他グッズはティーオールで制作するが、ティーオールがスポンサーについてくれるかどうかで制作するグッズが変わってくる。(今のところストラップは制作予定。)

カタログを早急に創らなければならないため、スポンサーが未定であってもデザインと価格はほぼ決めてしまう。

販売方法

Tシャツとタオルは前売り販売を行う。

チラシなどと一緒に、小・中・高、ママさんバレーチームなどの各団体にカタログと申し込み用紙を送り、注文を取る。Fax でも注文をとる。支払いは郵便局の口座を使う。(パンフの前売りと同じ)

<当時案>

販売価格 Tシャツ 2500円 , タオル 1200円 その他未定
(スタッフには無料ではなく、半額=1200円で販売することに決定)

制作数量

- ・Tシャツ 1800円×300枚=540000円
(スタッフ100枚として168枚販売すればもとはとれる)
- ・タオル 800円×100本=80000円
(67枚販売でもとがとれる)

※注) 原価は推定 合計 620000円

その他

在庫の保管場所をどうするか。

- ・パンフに掲載する記事を作る。

6月4日

Tシャツはアシックスで制作することに決定。

ティーオールとの交渉は5日の16時から。

タオルの原価が少し高くなる可能性あり。

制作グッズの種類が正式に決定。

ワーキング表

タスク内容	担当	決定事項	今後のワーキング
グッズデザイン	林、三上	全て完了	
各製作会社との連携	林	デザインの連絡、注文	見積もり
企画	全員	グッズの種類、本数	
パンフレットの記事作成	赤木	記事内容	写真など 詳細。いつ、どれだけ 置いてもらうかなど。
外部販売店との交渉	中泉、浅田、赤木	スカイとの交渉	

6月18日

<当時案>

- ・Tシャツ ? (2000円前後) 円×300枚 販売価格 2500円=約600000円
- ・タオル ? (1000円前後) 円×150本 販売価格 1200円=約150000円
- ・ストラップ 600円×300個 販売価格 900円=180000円
- マグカップ 650円×50個 販売価格 1000円=32500円

合計 962500

*追加注文について

だいたいの個数の予測が立ち次第、日置さんに随時連絡をする。

個数が足りないとき、最悪の場合大会終了後に発送する。

6月24日

アシックスの商品 (Tシャツ・タオル) の納品は7月の頭。

ティーオールの商品 (ストラップ・マグカップ) の納品は7月10日夕刻か11日。

*支払い方法について…伊藤さんに一回通してから支払うようにする。

7月4日

Tシャツのサイズによる枚数

白 M: 40 L: 70 LL: 40

黒 M: 40 L: 70 LL: 40

追加注文により白・黒のMサイズをそれぞれ50枚ずつ追加。

ティーオールの商品 (ストラップ・マグカップ) の納品は7月9日。

スタッフには大会前にTシャツを配付し、大会当日に着てもらう。注文は7月4日の総会の時にまとめる。配付する日、及び方法は決まり次第報告する。

・7月7日にTシャツを白・黒50枚ずつ、計100枚追加。それらの納品は11月までにできるか微妙な

状態。

7月7日

スタッフへのTシャツ配布は11日の最終ミーティングのとき

スタッフTシャツの値段は大会終了後にグッズの売れ行きをみて、それに合わせて決定することになった。(都沢先生には無料配布)

スタッフへのストラップは経費で買う。約120個

<アシックス製品の原価決定>

Tシャツ 1950円×300+100枚 販売価格 2500円=約780000円

タオル 750円×150本 販売価格 1200円=約112500円

ストラップ 600円×300個 販売価格 900円=180000円

マグカップ 650円×50個 販売価格 1000円=32500円

販売目標 (±0の状態)

Tシャツ 前売りを合わせて248枚

タオル 前売りを合わせて94枚

ストラップ 大会2日間で120個販売

マグカップ 大会2日間で33個販売

以後、販売促進部へバトンタッチ (当日ワーキングなし)

大会終了後

スタッフTシャツは1500円に決定。

残りのTシャツは2000円で後売り

総販売数

Tシャツ 272枚, タオル 99枚, ストラップ 38個, マグカップ 37個

依頼先

・株式会社アシックス

・ティーオール

総評

ストラップの販売個数が多く、余りがたくさん出てしまった。

Tシャツ、タオル、マグカップの製作個数は適当な個数だったと思うので良かった。

次にまた同じように行うことがあるなら、もっと早い時期から準備をして前売りをもっと活用できると思う。今回は納品の期日がギリギリだったということもあり、あまり大きく動けなかった。

Tシャツのサイズによる注文の集中を読み間違えた。M, L, LL, を作り、中間のLサイズへの集中を予想していたが、実際はMサイズへの注文が圧倒的に多かった。

今回はアメニティグッズ部内での仕事の役割分担がうまくできなく、一人でやってしまっていた感があるので、うまく割りふれたらもっと内容を濃くすることができたかもしれない。

この大会を通して、学ぶことがとても多かった。自分の力でここまでできるんだということが新しく発見でき、大きな可能性というものも見えてきたかもしれない。大会前は選手としての役割と、スタッフとしての役割の両方に力を注いでいかなければならなかったので、肉体的にも精神的にもとても厳しい日が続いたが、その分やりがいや達成感も大きく、とてもいい経験になったと思う。

2. 公式パンフレット作成部

チーフ 小野智史 (教育研究科)

制作スタッフについて

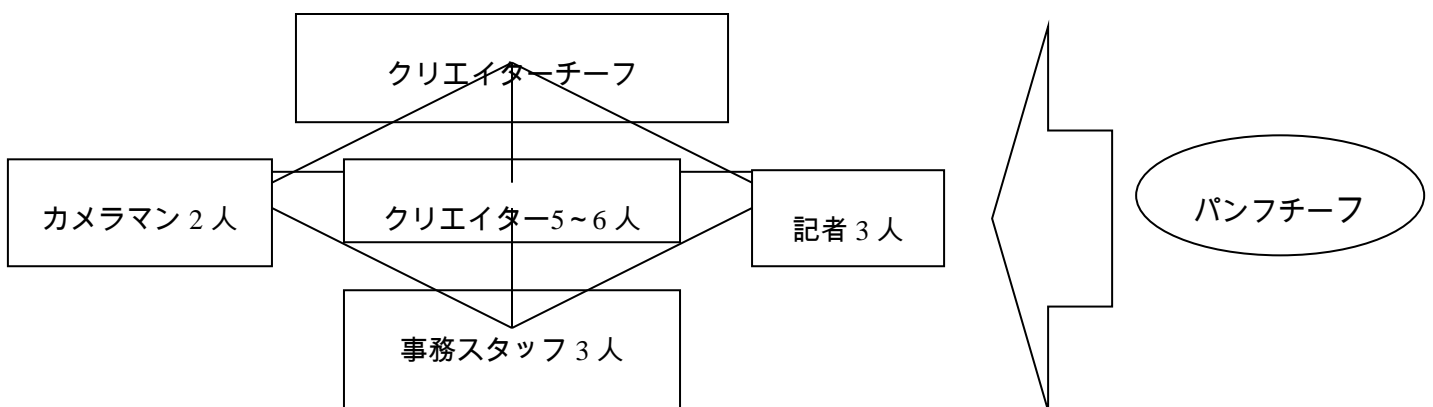
最終的には12人程度いたが、ほとんどが流動的で常時作業をしたのは5~6人だった。これは制作環境とも関係するがパソコンの台数に限りがあるため効率よく作業するための人数にも制限がある。ほぼクリエイター3~4人と執筆者(補助)1~2人で作業していた。振り返ってみるとこのスタイルは効率的だった。しかしながら「公式パンフレット」、「つくバレ☆」、「その他制作物」を一気に作らなければならない状態では人員不足だと感じた。クリエイターの技術と根性でカバーしてもらった感が強い。

クリエイターは倉本、小澤が中心で彼らが依頼する形で随時補充した。クリエイターの制作技術は非常に優れていて、技術面で苦労する部分は少なかった。時間が不足したと提出記事が非常にいいかげんだったことが制作過程で頭を悩ます点だった。

スタッフには記者、カメラマン、バレーボール専門者がいてそれぞれ個々の技術を生かしてデータを作成できた。このことは東西インカレの理念とも合致し、たいへん意義深いことであった。問題点としてはみなクリエイターに記事を提出するのが遅れたこと。クリエイター活動の実態がわからずデータの提出しかたが未熟でクリエイターを困らせたこと。デザインやレイアウトに執筆者がほとんどイメージを明示できずクリエイター任せになってしまったこと(クリエイターにとって負担が大きい)。が挙げられる。

常時動ける人数が5~6人というのは厳しい。特に車に乗って買出しに行くとか、印刷業者を回るとか、記事を催促するといった事務仕事をする人がいなく、クリエイターが作業を中断して兼任する事態が発生し、時間不足を増長させた。

今年度の反省から理想的なパンフレットの組織図を提示してみたい。



最低 15 人の体制を作り、クリエイターが制作活動に集中できる状態を作りたい。

制作スケジュールについて

本格的に動き出したのがゴールデンウィーク明けで実際遅すぎた。それまで作ったたたき台もほとんど意味がなかった。

パンフレットセクションが動き出しても大会全体のプログラムが決まらず、「待て」の状態が続いたことも問題だ。また後から後から関連団体が増え、広告も期限を守らず提出してくるのでスケジュールが逼迫した。

東西インカレの 3 週間前に東日本インカレが、2 週間前に西日本インカレが行われ、出場チームがぎりぎりまで決まらない。これはわかっていたことだが時間不足の最たる原因となった。

制作スタッフがそれぞれ自分の生活を持ち、授業や部活の合間に作業を行うという状況は厳しかった。

改善点としては

制作スタッフ集めを新学期が始まる前に行い 4 月初めから活動を開始できるようにしておきたい。

どんなパンフレットを作るかという内容やコンセプトを多くのスタッフで話し合い初めに方向性を明確にするべきだった。

大会全体プログラムが決まらなくても作っていけるページにもっと早くから取り組むべきだった。

記事依頼団体に提出期限を守ってもらうべく催促をもっと積極的に行い、回収方法をもっと確実に行えるようにするべきだった。

制作環境について

バレーボール作業室にはマックが最終的には 5 台（倉本所有 2 台、小澤所有 1 台、都澤先生所有 1 台、バレ研購入 1 台）あった。これは非常に恵まれていると思う。プリンタも速く作業環境は充実していた。

会議室、バレ研が深夜まで使える作業場だったこともたいへん大きなプラス要因だった。

制作部数、価格、規格について

フルカラー、100 ページ、3000 部、定価 800 円（前売り 600 円）は失敗であった。

売れ残り部数からみて 1500 部作成にして、定価をもう少し押さえるべきである。また 800 円という定価は来場した学生、生徒には高い。フルカラーにすべきでなかったかもしれない。

「いい物」イコール「売れる物」ではないということがわかる。必要だったのは観客がどのようなパンフレットを求めているかというニーズを正確に把握するということである。間違いなく今回のパンフレットは「いい物」であったと自負できる。しかし人々の求めに即してはいなかった。

改善点としては

一般人を対象にアンケートを取るなどしてニーズを正確に把握すること

発行部数をもっと厳密に見積もること

親子連れは 3 人で 1 冊

部活動単位での観戦の場合チームで 1~2 冊

女性はほとんど連れで来るから 2 人で 1 冊

カップルで 1 冊

出場団体には思い出として一人 1 冊でも購入してくれる可能性がある

もっと多くのアドバイザーに意見を聞き、地域のことが一番よくわかっている地元の人々のアドバイスに最も注目する。

本体の内容について

本体の内容は大きく分けて、

メインイベント紹介

写真館

サブイベント紹介

バレーボール物語

東西インカレの軌跡

大会概要

となっている。この内容は満足いくものである。カラーを活かして写真がふんだんに使えたこと。キャラクターが登場したこと。参加団体がもれなく記事を掲載できたこと。玄人向けにバレーボールの楽しみ方が掲載できたこと。東西インカレの軌跡が残せたこと。これらは制作側として満足できる。

一方読者の反応を調べなければならない。これについてはパンフレットにアンケートを差し込むなどの方法をとるべきであったかもしれない。この点については次年度からの課題であるし、今年度については今から追跡調査をしていく必要がある。

読みやすかったか？

内容が面白かったか？

必要とされている情報は載っていたか？

価格に見合った内容だったか？

改善点や要望はどうか？調べていく必要があるだろう。

記事の内容として誤りが多かったことは非常に重大な問題として受け止めなければならない。写真の掲載をミスしたことやプログラムの曜日を間違えたことなどは注意していれば確実に防げたミスである。時間不足が大きな原因である。またチェックが十分にできていなかったことが問題であった。

関連団体に依頼した記事については今後も考えなければならない問題がある。それはパンフレットの趣旨にあった内容を「書かせる」のかそれぞれの団体が思うままに「書いてもらう」のかどちらにするかということである。今回の場合を振り返るとある程度自由に書いてもらった内容をこちらがチェックして手直ししたり、書きたしてもらったりした。これは非常に時間がかかり、かつ労力を要した。始めからもっと明確な「枠」を提示して「書かせれ」ば効率はよかったかもしれない。相手も書きやすかったかもしれない。しかし明確な枠を提示するということは今回の東西インカレの理念である「繋がり」を強制という形に押し込むことではないかと思う。そこで下記のような依頼の仕方をしたがよりよい方法を今後、考えていかなければならない。

「まことに勝手ながら作成の都合上、写真の提出枚数や字数、また締切日等を提示させていただきました。ただあくまで目安となる要綱ですので事前にご連絡いただければ変更させていただきます。できるだけ皆様の希望にそった形でパンフレットを作成していきたく存じますので何かありましたらその都度ご相談ください。」

販売戦略について

販売戦略は評価できるところもあるが全体的には失敗だった。採算がつかなかったからだ。

評価できるところは前売りチケット販売で総販売数の約 56%にあたる 430 部をさばけたことだ。内訳としては前売りチケットで約 250、大学宛で約 150、カタログ販売で約 30 だった。特にバレーボール連盟による前売りチケット販売が好調で戦略としては成功した。また大学に最低登録選手の 18 名分を割り当てて購入させることも正解だった。カタログ販売についてはもう少し積極的に購入を呼びかければよかった。

当日販売では歩き売りに効果があった。イベントの間や試合の合間に直接観客に声をかけ、買ってもらった。人と人が交流できるという意味でもよかった。

販売ブースのディスプレイについてはもう少し工夫の余地がある。自然と目が止まり、足が止まるようなブースが今後の課題だと思う。

販売戦略として大きな改善点は 2 点。1 点目は販売部数の見積りをもっと厳密に行う

こと（前述）。2 点目は制作セクションと販売セクションを同じにすること。制作から販売まで一セクションが行う方が様々な面で都合がいいように感じた。

在庫管理、会計について

在庫管理について正誤表の差込作業、写真のやりかえ作業があったため、商品としてパンフレットを丁重に扱うということが徹底できなかった。さらに一回商品を包装紙から出してしまってバラの状態にしてしまったのも反省点である。持ち運びにくいし、汚れてしまうし、しわがついてしまう。在庫管理についても反省が多い。

会計についてはもっと綿密な計画が必要だった。前売り分の代金をどのように回収するのか、当日売れた分をどう集計するのか、セット価格で売った場合どう料金を割り振るのか、あまりに計画がずさんだった。今後は販売戦略と平行して会計手法についても熟慮する必要がある。

その他パンフレット運営全般について

パンフレットの運営全般については初めてだったこともあり、行き届かない点が多かった。売り上げで採算を合わせることができなかった点でパンフレット事業は残念ながら失敗だった。しかしながらパンフレット自体の質はこれまでどんな大会で作成されたものより価値あるもので、パンフレット制作事業に関しては合格点ではないかと思われる。改善点を明確にして今後に活かすことが大きな目を見た場合のパンフレット事業の成功といえるのではないか。

今回のパンフレット事業は開始時点で非常に困難な使命を突きつけられた事情がある。もともと入場料を取り、入場チケットとパンフレットを合わせた価格で 1,000 円程度を見込んで大会の計画が進んでいた。ところがつくば市の協力により入場料が無料になったため、パンフレットが入場チケットの代わりに役割を担うこととなる。つまり入場した分だけパンフレットを売らなければならないということだった。しかしつくば市からの協賛金、スポンサー料、大学からの補助が集まることでパンフレットが収入源とならなくてもよくなった。この時点で戦略を転換すべきだったと思う。現にチーフマネージャーから「独立採算で」と何度も念を押されていたのに「いいものをたくさん作って、来た人全員に売らなければ」という固定観から抜け出せなかった。パンフレットチーフとしてのこの上ない反省だと感じた。次回はパンフレットの役割をはじめからもっと明確にしておき、多くの人間で企画を立て、地域の人の声に耳を傾け、もっと敏感にニーズをつかむ努力をしなければならない。

パンフレット事業として一番の収穫は人が繋がったことである。高度な技術を持った人が多く集まり、仕事を通してコミュニケーションが取れたことを今後も忘れず、次回も同様に人と人との繋がりを大切にしていければいいと感じた。

3. 地域情報誌作成部

チーフ 檜山 佑介 (体育男子)

2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくばに向けて学内情報誌「つくバレ☆」を発行するにあたり、具体的な取引先となったのは学内では体育会男女バレーボール部、医学支部男女バレーボール部、バレーボール同好会の 5 団体、学外ではつくば市バレーボール連盟、つくば市商工会、東日本印刷の 3 つである。印刷会社を除けば何らかの形で「つくバレ☆」の中に記事を掲載する団体である。学内の団体のとりまとめはそれぞれの団体から選出された情報誌作成部のメンバー、バレーボール連盟に加盟するチームのうち記事を掲載させていただいた家庭婦人・社会人男女合わせて 34 チームのとりまとめは連盟会長の石黒さん、商工会に加盟する事業所のうち記事を掲載させていただいた 15

店舗のとりまとめは商工会の吉原さんにそれぞれ一任したことにより、意思の疎通・情報の伝達が複雑になることなく済んだ。

続いて金銭面であるが、A4版・一部カラー・総ページ44・2000部印刷という情報誌を製作するために、東日本印刷さんへ支払った印刷・製本費用は300,000円。主な制作費は以上である。一部200円で販売で1500冊以上の販売を試みたが…。この点は事後販売で挽回していきたいと考えている。なお、商工会加盟店紹介の15店舗からは1事業所3000円の広告料を徴収しているので広告料収入は45000円となる。

情報誌作成部の構成メンバーは他のセクションと掛け持ちで活動していた人間が多く、実際に活動していくには情報誌作成に専念できる人間が少なかったように思う。製作過程において、情報誌作成部とは異なるメンバーからも多大な手助けを借りることができ、完成に至ったことを感謝している。さらにメンバー全員が集まれる機会が非常に少なく、情報を共有することができなかつたため、どうしても製作の段階で負担のかかる人間とそうでない人間がはっきりとわかれてしまったことが大きな反省点として残っている。

ワーキングスケジュールの実際についてだが、この点に関してはまったくと言っていいほどうまくいかなかった。こちらの催促不足もあったせいで、期日までに原稿があがってこない、データが送られてこないなどといった、時間との関係で発生するトラブルが相次いだ。印刷・製本する課程を外部に任せる段階を踏む以上、締め切りというものの大切さを切実に感じた。さらに、クリエイターさん任せの作業段階では、自分たちは何も手助けになることができず、歯がゆい思いをしたのを記憶している。もう少しクリエイターチームにかかる負担を減らすことができれば、と思った。

実行委員会の活動を通じて得た出会いは非常に多く、自分のプラスになるものばかりであったように思う。一緒に仕事を進めることが多くあった学内のバレーボール団体をはじめ、商工会やバレーボール連盟など、この大会の企画自体が存在しなければあり得なかつた出会いは非常に価値あるものだと思う。今後、さらには来年以降の大会の企画・運営に、今回得ることができた出合いを役立てることができれば幸いである。

すべてを振り返ってみて、一番感じたのは準備期間が短かつたことである。学内の組織発足や外部団体との交渉時期をもう少し早めることができれば、もっと余裕を持った行動が取れたと思う。授業や毎日の練習の合間を縫っての作業は大変だったし、テスト期間なども特に考慮されなかつた点は反省すべきだと思う。何かを成功させるためには犠牲になるものがあるといいとは思いますが、大会までの1、2ヶ月は生活の中で犠牲にしなければならないものが多すぎたように思う。その分充実感・達成感は大きかつたが…。来年は模索だらけだった今年の経験・反省点などをうまく活かして、もっと効率よく、順調に作業が進むことを願っている。

《7》 クリエイティブセクション PR タスク

1. マスメディア対応

チーフ

小川 将司 (体育男子)

マスメディア対応部では東西インカレという大会をバレーボール関係者だけでなく、一般の方々が興味を持ち、会場に足を運んでいただけるように広報活動を行いました。活動内容は、各新聞社の地方版や一般紙に大会の記事を載せてもらえるように投げ込み書を作成し、つくば記者クラブで配付しました。また新聞の折り込み広告などにも配付しました。ACCSには東西インカレのCMを撮影し、放送していただきました。つくば市長の定例記者会見があったのですがこれは都澤先生におまかせし、筑波大学の新聞や紫峰会などで学内生への広報活動をおこないました。

感想

今回の東西インカレの運営に関わってみて一つの大会を運営するのがこんなにも大変なものなのかと驚きました。実際に広報活動をしてみて、この大会をうまく宣伝できなかったと思います。こちらが新聞に記事を載せてほしいと思ってもそれを決めるのは新聞社なので、なかなかスムーズにできなかったと思います。仕事を始めるのが少しだけ遅かったような気がします。あと一ヶ月位早く仕事を始められたらポスターやホームページなどによる広報もより良い活動ができたかもしれないですし、マスメディアもより幅広く活動できたのではないかと思います。そして、これからバレーボールをしていく中で大会を運営してくれている方々への感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思いました。

2. ポスティング部

チーフ

高橋 一郎 (同好会)

メンバー

高橋、白石、中泉、古内、斉藤、佐々木、倉本、小澤、

ポスティング部制作物 (ワーキング参照)

ポスター 1000部 (紫峰会) チラシ 40000部 (紫峰会) 横断幕 5枚 (新報社) 暫定チラシ、のりのりバス用ポスター等

ポスターチラシ配布先 (ワーキング参照)

市内施設・回覧板・のりのりバス・体協登録団体・市バレー連盟・商工会加盟店・ホテル協同組合・研究所等・東西インカレ協力団体・近隣中学・県内高校・県外高校・県内大学・筑波大学学内・体育授業・同好会試合会場・東日本インカレ・西日本インカレ・協賛企業 (パックス、GALLERY2)・その他

配布方法 (基本的に依頼文が必要)

持ち込み (市スポーツ振興課/商工会/ホテル松島/研究交流センター/竹園高校/)・郵送・関係者に依頼・直接配布など

横断幕掲示箇所

学内 (大学会館・体芸棟前)・さくら大橋・当日会場

主なスケジュール

- 5月12日（月）…スタート・商工会の方に話を聞く
- 13日（火）…ポスター・チラシのおおよその配布件数の設定（随時修正あり）
- 21日（水）…小神野さんと打ち合わせ
- 28、29、30日（水～金）…暫定チラシの印刷作業。データ入稿〆切
- 6月6日（金）…ポスター完成
- 11日（水）…チラシ完成、仕分け作業
- 12日（木）…配布（可能な箇所）。仕分け作業。横断幕納品。
- 13、14日（金、土）…仕分け作業、配布、横断幕加工作業
- 14日（土）深夜…さくら大橋に横断幕掲示
- 16日（月）…発送

感想・意見・反省等

横断幕などの際、デザイン班との連携がとりづらかった
電話代
夜遅くまでやり過ぎ
集合時間にルーズ
サークルが違うため、何回もミーティングができない
どの範囲でPRすべきなのか不明であった
PRの全体像が見えなかった。また、どのような大会になるのかもわからなかったため、PRしづらかった
人数が足りない
もっと早く取り組むべきである
“PR”という意味では、全員が兼任でも良いと思う
「車持ち」が常時必要
力仕事が多いので、男の人の人数を増やしたほうが良い
チラシやポスターの効果があつたようなので、成功だった（アンケート結果より）
ポスティング部とクリエイト班との連携が不十分（用紙の大きさ、予算の決定等を明確にしておく必要がある）
配布したポスターの把握、確認作業が不十分
良い勉強になった
厚生課、学生課の許可をもっと効率よく取っておく必要があつた

来年にむけて

制作物は早くつくりたい。配布を大会1ヶ月前には完了しておくべき。
人員の確保、メンバー全体が動けるようにしたい。
配布の戦略、全体像を明確にしておくべき
配布の際に便利な企業の協賛・協力が欲しい（JRバス関東、関東バス、クレオ、カスミ）
事前にPRできるイベント等があるともっとよいのではないか
活動時間に配慮
制作物完成前にできることは終わらせておく
など

《 8 》 クリエイティブセクション スポンサーダタスク

チーフ 松田 裕雄 (体育科学系)

今回、スポンサーは5種類に(TOPパートナー、ゴールドスポンサー、オフィシャルサブライヤー、オフィシャルサポーター、メディアパートナー)分類いたしました。従来のように経済的支援の「依頼」という形を全面に押し出すのではなく、本大会理念への「賛同」をひたすら呼びかけてきたというのが本音でした。どんなに大きな組織対組織であっても、その主体が人間である限りは、これらを結びつけるものは、最終的にはやはり「心」や「精神」にあります。そしてスポーツの魅力は、これを介して人々の「心」を繋げていくことにあります。今大会は、こうした「心の文化」への賛同を我々の「心」から外部の皆様への「心」へと呼びかけてきました。スポンサーの獲得とはいえども特別なものではなく、基本的にはこうした理念を誠心誠意にお伝えし、貫徹してきただけでありました。このような呼びかけが、一般市民に対してであればそれは「集客活動」であり、新聞社やメディア機関であれば「PR 活動」であり、そして営利体や企業体に対してであったのがこの「スポンサーダタスク」であったと思っております。

このような「スポンサー活動」に賛同して頂いた各企業の皆様には改めて心から感謝の意を申し上げたいと思います。今回は、つくば市の零細企業から大企業までの地元にかける「想い」の強さや、大都市企業のスポーツ文化に対する賛同やご理解には改めて驚かされました。それと同時に、生き残りをかけたビジネスにかける多角的な視野とそれに伴う実行力は非常に勉強させられるものがありました。直接的な経済効果を産むとは言い難い今大会には、きっとそうした多角的かつ長期的なビジョンを持ってご賛同して頂いたことと思われまふ。このような強く、大きく、あたたかい皆様とともに今大会を創り上げることができたこと自体に今大会「理念の貫徹」と「大成功」という言葉を使いたいと思ひます。

《 9 》 事務局会計報告

チーフ 伊藤 リナ (体育科学研究科)

担当者

家前憲夫 (体育専門学群、体育会バレーボール部)

斎藤暁子 (体育専門学群、つくばユナイテッド)

伊藤リナ (体育科学研究科)

業務内容

金銭の出納管理

当日のつり銭準備

校費での物品購入、調整

会計報告書の作成

具体的な課題

大会直前および当日の物品購入における連絡

・反省点

物品の購入に関して、特に大会直前および当日の効率が悪かった。事前に当日使う消耗

品を校費で購入するため予め報告するように連絡したが、徹底されず、前々日から当日において消耗品を購入し、領収書が提出されることが多かった。

今後の課題と対策

今回は大会が初めてであるために当日に使用する物品が把握できなかったことを考えると、仕方がなかったと思うが、次回開催があるのであれば、当日の組織体系と分担をしっかりとさせて、できるだけ早く当日セクションごとに備品リストを作成し、校費担当者に提出した方がいいと思う。その方が、業務遂行上も慌てなくてすむといえる。なお、あらかじめ、校費で買える店や物品を伝えておくことも大事。

予算書の作成

・反省点

予算書の作成が遅れたため、校費の許可も遅れ、使用効率も悪くなった。また、パンフレット販売の収入見込みなど甘かった。

今後の課題と反省

これも今回が初めてだったということが大きい。校費の執行に関しては、この事業費補助に限らず、広く言われていることなので、それを理解した上で、迅速に動くしか方法はほとんどないだろう。校費に関しては、大学の経理担当者を実行委員会に入ってもらった方がいいと思う。ただ、来年度も校費を獲得できるのだろうか（一つの事業のみに何年も校費を獲得できるのだろうか、確認できるのであれば確認した方がいいのでは）

5. 全体における今後の課題

連絡の徹底

4でも述べたとおり、連絡が伝わっていないことが多かった。また、もっと情報を流す必要もあった。メーリングリストによって幾分改善されたが、打ち合わせや公式HPなどを有効に活用するべきだった。

セクションの徹底

セクションとしての機能があまり働かなかったのではないかと。一人で複数のセクションの仕事をする場合も多く、責任の所在が不明確になったと思う。その結果、会計においても、そのセクションでの会計を把握しているものがいなかったと感じる。しかし、一方では、それが柔軟な対応にもつながったので、一概には言えないかもしれないと思う。これも初めての大会であるという要素が大きいので、次回に向けては改善できると思う。

添付資料

支出一覧（途中報告、資料①）

校費使用一覧（途中報告、資料②）

会計の現状（残金等、資料③）

「”繋ぎ”のバレーから”繋がる”社会を！」

チーフマネージャ 松田 裕雄

以上、2003 東西インカレの大会舞台裏を報告してきました。賞賛にしても、批判にしても、丁寧に書かれた報告書の声それ自体に、スタッフ皆のエネルギーの強さを感じます。今回は従来のスポーツイベント（スポーツの為のスポーツイベント）とは大きく異なり、地方分権化という時代の潮流の中でのビジョン、即ち人、まち、社会づくりの為のスポーツという非常に広範囲に渡る対象との連携への挑戦でありました。目標とする完成形が質・量ともに高位な「頂き」にあったこと、そして何よりも「初めて」の試みであったことから本当にハードであったと思います。どう「連携」、「コミュニケーション」をとればいいのかかわからず、何度も効率の悪いミーティング、冷めたミーティングを繰り返したこともありました。

しかし、より強いチームを創って行く為にボールを「繋いでいく」バレーボール選手としても、又よりいい大会を創っていく為にあらゆる情報を「繋いでいく」スタッフとしても、その過程の本質にはいつも「いかにして人の「心」を「繋いでいく」か」という命題があるように感じます。スタッフの皆はこの命題と常に背中合わせにありながら、非常に前向きに取り組んできたと思います。改めて筑波大生の豊かな発想力とエネルギー、つくば市民、つくば産業の地域づくりにかける「想い」の強さを感じました。

こうした強く、大きく、熱い「想い」を内在させるこのまちには、参加協力団体、協賛社をはじめ地域、分野は異なれども、やはり同じくして「熱い」魅力が集まってきました。コートで活躍する選手、会場で走り回るスタッフ、一生懸命に踊るこども、その大小を問わず「魅力」が「魅力」を生かし、人が人を「活かす」。今年は、そのように相対的で「いきいき」した「場」がスポーツを介して生み出せるのだということを社会にアピールした「認知の年」であったと思います。

さて2日間に渡る大会はまさに「魅力のるつぼ」であり、ひとつひとつの瞬間に、その「時」と「空間」、そして自分自身が「熱く」なっていくのを体感したのではないのでしょうか。

こうした「熱」に溢れた「時間」と「空間」は実行委員会スタッフを中心とした、そこに関わる人々の「前向きな」日々の営みそれ自体と、多くの「生きるエネルギー」、そして語り切れないほどの「喜びや困難」の繰り返し、これらの持続的な営みによって生み出されたものではないかと思えます。

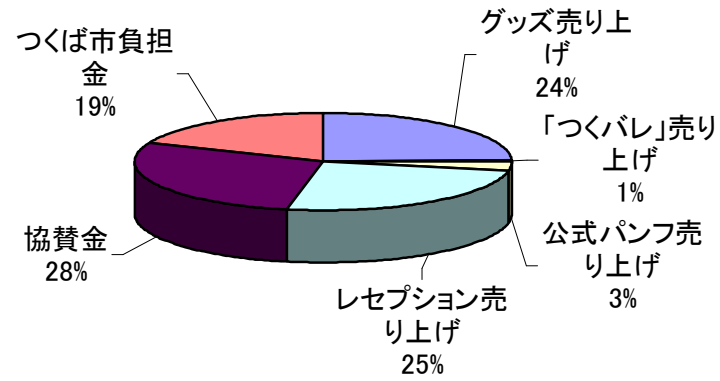
この力強い流れが今年の夏で消えてしまうことはありません。今後もバレー、スポーツの流れ、そして社会、日本の流れとして、より多くの人へ、より広く社会へ、そしてより深く次世代へと働きかけていければと思います。大層なことを申し上げているようですが、たとえほんの一瞬であっても、これが吹き抜けた後には人が元気になり、幸せになれるような、そんな風でありたいと考えます。

2004 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば！ここではどのような魅力が溢れるのか、是非楽しみにしててください！

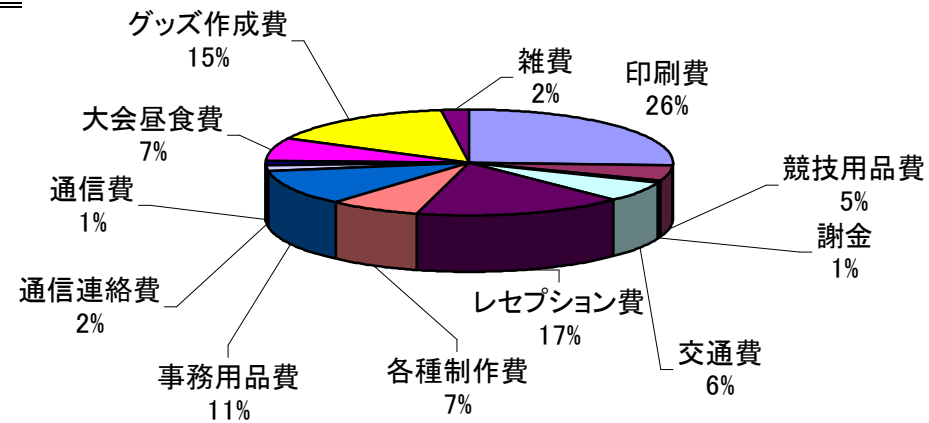
TABLE 1 最終決算表

収入の部				支出の部							
項目	内訳	予算	決算	備考	項目	内訳	決算	大学	つくば市	その他収入	備考
大学	負担金	2,203,000	2,203,000		会場費		9,720			9,720	リハーサル、施設管理費
つくば市		1,095,000	1,095,000		印刷費		1,984,825	628,425	1,095,000	261,400	
協賛・補助金		1,745,000	1,685,000		ポスター		85,000		85,000		
	topパートナー	800,000	800,000	ミキ、サントリー	チラシ		386,400		125,000	261,400	
	ゴールドスポンサー	400,000	400,000	沼尻、ココロラ、アシックス、ライトオン	大会公式パンフレット		1,213,425	628,425		585,000	
	オフィシャルサプライヤー	250,000	200,000	500000×4	「つくばレ」		300,000		300,000		
	メディアパートナー	250,000	240,000		競技用品費		367,859	269,379		98,480	
	商工会	45,000	45,000	3000×15	ラインテープ他		39,765	27,480		12,285	
グッズ売り上げ			1,494,400		グリーンフェンス		105,000	105,000			
	前売	600,000	348,700		表彰用郷土品		86,195			86,195	
	当日		791,500		参加賞(書類ホルダー)		136,899	136,899			
	後売り		27,600		交通費		496,023	44,299		451,724	
	スタッフTシャツ		129,000		役員、V選手、出演団体交通費		287,060			287,060	
	公式パンフレット前売り		178,200		その他交通費		101,614			101,614	
	サブパンフレット前売り		19,400		荷物運搬費(レンタカー等)		87,349	44,299		43,050	
雑収入			121,000		学運備品運搬料補助		20,000			20,000	レンタカー代の補助
	各団体弁当負担分	0	121,000	各大学、学運、日本橋	パーティー費		1,278,057	33,810		1,244,247	
パーティー収入			1,471,000		レセプションパーティー		903,875	33,810		870,065	リボン代他
	レセプション		1,128,000		ファイナルレセプションパーティー		374,182			374,182	
	ファイナルレセプション		343,000		各種制作費		1,728,741	305,134		1,423,607	
臨時収入	つくばれ売り上げ		15,100	随時追加 12月2日現在	横断幕(大学)		31,500	31,500			
小計(校費以外)			5,881,500		横断幕、立て看板、エントランス		357,000	189,000		168,000	
					タペストリー		52,500	52,500			
					大判出力		8,000	8,000			
					グッズ		1,165,500			1,165,500	Tシャツ、タオル、ストラップ、マグカップ
					その他		90,107			90,107	パンフ等
					記録用		24,134	24,134			写真現像、DV
					事務用品費		851,328	745,328		106,000	
					パソコン等(周辺機器含む)		357,189	357,189			2台、デジカメも
					インクカートリッジ他		281,400	281,400			トナーカートリッジ、定着オイルロール倉
					USBフラッシュメモリ		45,307	27,667		17,640	
					その他		167,432	79,072		88,360	フィルム代、文具代他
					通信連絡費		220,660	0		220,660	
					郵送費		101,600			101,600	宅急便含む
					電話・FAX		119,060			119,060	
					会議費		22,275			22,275	
					雑費		828,320	35,175		793,145	
					手数料		8,845			8,845	
					各種レンタル機器		65,625	35,175		30,450	水槽、ゴミ箱、灰皿、コーヒー
					弁当		548,000			548,000	
					氷・お茶菓子		24,388			24,388	
					その他		131,462			131,462	当日会場準備費
					謝金		50,000			50,000	今宿太鼓
					コピー代		141,450	141,450			
					残金		155,242			155,242	
合計			8,084,500	うち大学負担分(2,203,000円)			8,084,500	2,203,000	1,095,000	4,786,500	

収入シェア



支出シェア



V. 大会公式調査結果

マーケティングリサーチセクション（新設）

小野 智史（教育研究科）

羽田野 真帆（人間学類）

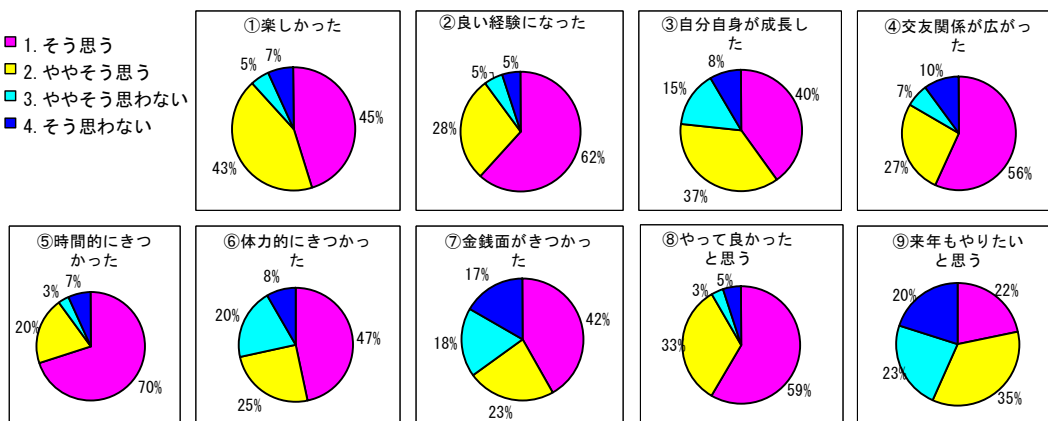
高橋 沙矢香（人間学類）

本大会を通じて以下4種類のリサーチを行いました。1) スタッフアンケート（2003 東西インカレ実行委員会委員に対する意識調査, 2) 観客アンケート（大会当日の観客向けに行った調査）, 3) 参加団体アンケート（バレーボール以外の活動団体で、今回大会に参加した団体に対する意識調査, 4) 学内アンケート（学内一般学生に対する意識調査）
これらの分析・考察を報告いたします。

1. スタッフアンケート

有効回答者数 60名

1) 選択式回答



2) 記述式自由回答

肯定的意見	とても良い経験になったと思います
	皆様お疲れ様でした。最初はどうなることかと思いましたが大成功で良かったです。
	最高☆いなめない
	とてもすばらしい経験になりました。いい思い出になりました。やるとしたら来年はもっとシステムを整えてのぞめたらと思います。
	来年も絶対やります。一生懸命働きます。 来年はもっと頑張ります！
改善点など	人使いが荒い
	パンフレット作り過ぎ(2)
	チラシ等を早めに作成できるようにどうしたらいいか考えてほしい
	人手が足りなかったと思う。負担の大きい人とそうでない人の差が激しかった。
	スタッフの人数増えれば…。以外とかかかってみたい人周りにいた。
	大変だったー
	時間の拘束が長かった。片手間でやるのはつらい
	時間的にきつすぎた。
	夜はやめて。出会えなかった。必要ないミーティングありすぎ！要注意！次はよろしく☆
	ミーティングが長い。夜遅すぎる。レセプションはただ良かった。
ミーティング長い	
時期が悪い	
その他	ファイナルレセプションの準備お疲れ様でした。

3) 分析・考察

I. 選択式回答

① について

・スタッフの仕事を通じて、自分自身が楽しめたと感じている人が多い。スタッフ自身が楽しめたということは、大会での雰囲気の良いさにも繋がっていたと考えられる。

② について

・良い経験になったと答えている人が非常に多い。スタッフの経験を通して、何かを得ることが出来たという人が

③ について

・自分自身が成長したと答えた人が、8割近くいた。この大会が、関わった人に与えた影響は大きかった。

④ について

・東西インカレを介して、交友関係が広がったと言う人が多い。バレーに関係したさまざまな分野から人が集まった結果であると考えられる。スタッフの中でも、人と人とのつながりが生まれたと言える。

⑤ について

・「そう思う」と答えた人が 70 パーセントと多いのが目に付く。ミーティングが長い、作業に時間がかかる、当日・前日などは丸一日の仕事であったことなどから、時間的な拘束が多かったと言える。

・1人が複数の仕事を担当するという場面が多く見られたので、さらに拘束が増したのではないかと。人手が増えれば、この問題は軽減可能であろう。

・最も忙しかったのが1学期末であり、テストやレポートなどのあった人も多かったのではないかと考えられる。

⑥ について

・ミーティングが夜遅くまでかかってしまうこともあったためではないだろうか。効率を上げる、休憩を入れるなど今後の改善が必要であると言える。

⑦ について

・金銭面がきつかったと答えた人は、65%であった。レセプションはただが良かったという意見もあることから、レセプション代等の負担が大きかったと言える。

⑧ について

・非常に多くの人が、やってよかったと感じている。東西インカレがスタッフにとっても、プラスになったと言える。これだけ多くの人が、同じ感情を共有出来たということを来年以降も続けていくことが出来れば良い。

⑨ について

・来年の参加に肯定的な姿勢である人が 57%であり、半数を越えた。これだけ多くの人が意欲的であることは、良い結果である。

・しかし、今年の感想として肯定的な意見の人の割合から考えると、やや低い。それだけ仕事が大変であったと感じている人が多いということであろう。

II. 記述式自由回答について

- ・良い経験になったという意見が多い。
- ・来年に対する意欲を示した感想もあり、改善点も挙げられている。
- ・時間的な拘束が長いという意見が多い。ミーティングの時間等を再検討する必要もあると言える。
- ・来年は、人手を増やすことが必要である。また、増えた人手をうまく動かす力量も求められる。

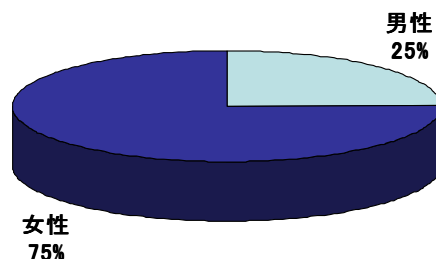
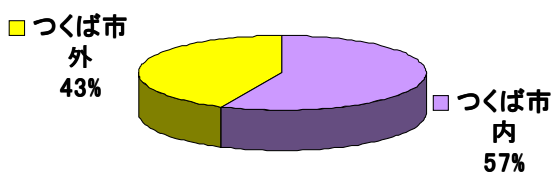
2. 観客アンケート

有効回答者数 725名

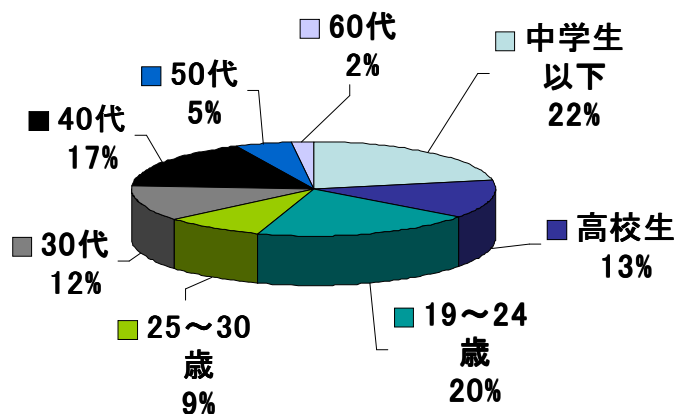
1) 選択式回答

'03東西インカレ

観客者の属性

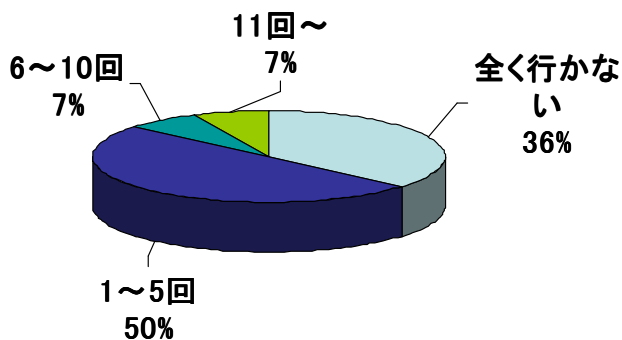


'03東西インカレ

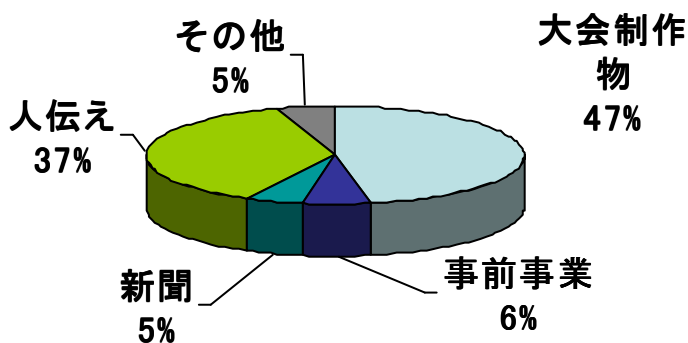


観戦習慣

'03東西インカレ



'03東西インカレ



2) 記述式自由回答

肯定的意見・感想	他のスポーツと比べて早く点が入るのが面白い
	間近で見れて、迫力がある
	関係者の方々の盛り上げようという熱意を感じた。
	普段見れないような試合が生で見れて良かった。
	レベルの高さ・白熱した試合に感動・感激
	バレーボールの魅力を感じた。
	レセプションなど選手との交流ができてよかった。
	応援もすごい。
	地域住民との一体感が良かった。
	入場無料でよかった。
	グッズ、パンフレット、ポスターなどすごい！
	バレーボール教室でいろいろ教えてもらえてよかった。
	大学生が多く関わっていて親しみが持てる。
	いろいろなイベントがあつて楽しい。
様々な年齢層の人が見に来ていて驚いた。	
否定的意見・感想・要望	ゲストとしてVリーグ選手を呼べるのはさすが筑波大。
	またぜひ見にきたい。
	県外の人は居心地が悪いかもしれないと思った
	コートが狭くて選手が思い切りプレーできていないように見えた。
	(チケット関連など)連絡事項が遅くて困った。
	観客席の指定している席と自由席を明確に表示してほしい
アピールが少ないと感じた。	
遠方から来ている人の事を考慮して欲しい。(最後まで試合が見れなかった)	
大学最強チームが存在していることをもっとイベントを増やしてアピールして欲しい。	
2郡の交流試合も見たい。	

3) 分析・考察

Q1 「観戦動機」について

- ・ 56%が大学バレーボールを主の動機として観戦に訪れた。残りの 44% (知り合いや息子・娘が関わっている、サブイベントに興味を持った、近いから・ただだから) はそれ以外の理由から会場に足を運んでいる。これまでの大会とは明らかに観客層が異なっていることが分かる。
- ・ アンケートがサインボール抽選会とセットだったためバレーボールに興味の強い人がアンケートに答えた可能性が高いと考えられる。はっきりとしたことはいえないがバレー観戦以外の目的で足を運んだ人の割合はもっと多くなるのではないか。
- ・ 地域のネットワーク、特にママさんバレーに携わる人々のネットワークによる集客が比較的多いと考えられる。

Q2 「情報入手経路」について

- ・ 全ての PR 戦略が成功している。それぞれのメディアがそれぞれの役目を果たしたといえるのではないか。
- ・ 大会チラシは 4 万部作成して PR したため情報入手経路の中で最も割合が高い。
- ・ 「関係者の参加」「知人・家族から聞いた」など人のネットワークが情報入手経路で大きな役割を果たしている。

Q3 「観戦習慣」について

- ・ まったく観戦に行かなかった人が観客の 3 分の 1 いた。Q1 でも書いたように知り合いや息子・娘が関わっている、サブイベントに興味を持った、近いから・ただだからとい

う理由が考えられる。

Q4「バレーボール経験」について

- ・ これまでほとんどバレーボールとかかわりのなかった観客が 32%いた。これまでの大会と観客層が大きく異なっている。
- ・ バレーボール経験者が観客層で多い。バレーボール経験が観戦に来る動機付けになっていることは十分に考えうる。

Q5「記述」について

- ・ バレー以外の魅力を感じている人が多かった。

Q6「年齢層」について

- ・ 女性が多い。
- ・ 年齢が幅広い。競技者に限らず広く一般人へと、多世代にわたって宣伝してきたことがそのまま反映されたと考えられる。

3. 参加団体アンケート

2003 東西インカレに参加してくれた人及び団体に大会の感想を聞いた。対象は様々でサブイベントに参加してくれた団体の代表者、スポンサー、アドバイザーなどである。自由記述式のアンケートであった。貴重な意見がたくさん寄せられ非常に参考になる。次回東西インカレへの運営に役立てたい。

1) 質問項目

- 1、大会関係者として、「2003 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば」にどのようなことを期待していますか。
- 2、実際、大会を終えてみてどうでしたか。(良かったこと・悪かったこと)
- 3、大会を開催したことで、関係者・関係団体・地域等にどんな影響がありましたか。
- 4、今大会では、どのような関わりをしていただきましたか。
- 5、大会の運営や、実行委員・スタッフについてのご意見をお願いします。
- 6、来年度の大会もつくばで開催されることが決定したのですが、来年度への意向や方針、ご意見等ありましたら、自由にお書き下さい。

2) 結果

《スポンサー》

A 社

1、

大会を通じてつくば市の活性化
市民のバレーボールへの関心度促進と啓蒙
大会のつくば市開催の定着化

2、

大会の競技でハイレベルな選手の活躍に感動した。実際に生で試合を見るのは格別に違う。大会運営のスムーズさ、多くの人達の支援・協力が目に付いた

3、

今回つくば市で初めての開催でしたが、市民に与えたインパクトは大きかったと思います。今大会が開催された事を知らない人も多く、知っていればぜひ見に行きたかったとの声は多かった。

4、

スポンサーとして売店、ブランド広告をさせていただきました。

5、

今回サントリーさんがメインスポンサーとなっていました。次回は飲料関係では一社に絞っていただければもっと多くの協力・支援ができると思います。運営には大変ご苦労されたと思います。改めて実行委員・スタッフの皆さんに敬意を表します。

6、

次回もお声をかけていただけましたら幸いです。来年はもっと多くの人々に会場へ来ていただける様アピールに、工夫が必要と思いました。我々もお手伝いします。

B社

本物の技術を地域のスポ少、体育関係者に見ていただくことができる。又、地域振興として、スポーツで街おこしが可能かどうか期待していた。今後の取り組みとして、スポーツで街おこしは可能であると思いました。

大会としてはたいへん良かったと思う。(レベルの高い試合が行われた)つくば市内のスポーツ関係者の参加が少なく、種目は違いど本物の技術を見ることは大切なことだと思った。(地区小・中学生の参加が少なく、教育委員会を通して周知することも必要である。)

たいへん盛り上がったスポーツイベントが開催され、ホテル・地域特産品のPRができたことはたいへんよかった。

協賛商品、広告、ポスター掲示等で協力させていただきました。

実行委員、スタッフの皆様の行動力、企画等はすばらしいと思いました。

《出演団体》

ショータイム (DAS) (林田祐樹)

産学官民連携というコンセプトが実現するか。また、どのくらい関心を持っている人がいるか。今後、どのような展開になっていくのか。

多くの人々がコンセプトに賛同し、協力して作り上げた素晴らしい大会となった。大会を続けていくともっと運営もスマートになり、もっともっといろいろなことができる可能性があると感じた。

自団体にとって、直接的な影響はなかったが、つくばのスポーツ、芸術活動が盛り上がっていくという点で、良い効果があったと思う。新たなネットワーク構築ができ、今後、も

っと影響がでてくるのではないか。

ショータイム委員会の一員として、大会にかかわったが、自団体の調整で手一杯だったので、間接的に関わったという感じ。

妥協しない姿勢が素晴らしいと思った。本当におつかれ様でした。

今後も、協力できることがあれば、積極的に参加していく方針です。よろしくお願ひします。

チアリーディング (奥寺由紀)

バレーボール関係者だけの内輪のイベントなのではなく、多くの人参加によって成り立つイベントであること。

実行委員の方々が一生懸命準備している姿を見て、励まされました。

私は、都内の小学生のチアリーダー達と自分が指導をしている跡見大のチアリーダーを“つくば”という土地に連れてきたのですが、両チームにとって、とてもいい経験になったようです。(詳細は報告書)

皆様とてもよく動いていました。特に連絡・調整係となってくれた中村玲さんありがとう。

地域での認知度を上げ、多くの方にとって“毎年一回の楽しみな試合”となれるといいですね。会場も観客席が多いところが必要になりますね。

REAL JAM (小宮山 浩之)

1、

全国トップクラスの選手の試合を間近で見ることが楽しみだった。

今までバレーのコートで踊るなんてことは、一度も経験がなく、その新しい試みに不安もあったが、楽しむことができた。

2、

つめが甘く、もう少し頑張ればもっと会場を湧かせることができたのではないだろうかと思った。

ダンスに全然興味のない人たちにも、少しでもダンスの面白さを伝えることが出来たのが良かった。

3、

このような大人数で同じ振りを踊ることは今までなかったので、良い思い出になった。1人1人楽しんで踊ることができました。

5、

レセプションなど、三千円は、学生さんにはちょっと高めでしたので、一般の人はいいと思いますが、関係者は少し安くしてもらえたら、もう少し参加者が増えたとは思いますが。

色々、ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ございませんでした。おつかれさまでした。

6、
もし、良ければ、また声をかけて下さい。時間に余裕があれば、是非、また協力させて頂きたいと思っております。

《審判》

A氏

2、すばらしかったですね。

3、「つくば」が一つになっていく感じがした。
(筑波大が決勝に残ったり優勝したことも大きな要因だが)

4、審判員（県内）

ややぎこちなさは見られたものの、一生懸命つくりあげていく情熱が感じられた。ただ、だいぶ疲れた様子もみうけられたので、休憩をうまく取りながら、すべてのお客様を全員が歓迎するという意味で、会場内では、解散するまでシャキットとして下さい。

本年は、みんなでつくりあげた感じがいろいろな場面でみられました。非常に良かったと思います。来年以降は、つないでいくわけですが、ぜひ今年のような緊張感と情熱で実施されることを望みます。来年成功するように引き継ぐまで、今年度の業務だと考えてください。来年は本年度以上の成功を期待します。

都澤先生や松田君をはじめとするスタッフの皆様、本当にお疲れ様でした。

B氏

バレーボール熱の高揚（特に未経験の子供たち）

講習会参加者に、チーム単位以外での参加がなかったことから、良き実績ができた後の来年に期待したい。

特に変化なし。

大会時の試合記録のみ。

問題が起きていたか、どうか、わからなかったということは、大成功ということではないでしょうか。しっかりと大学生の試合がメインであったことが感じられました。

4. 学内アンケート

有効回答者数 905名

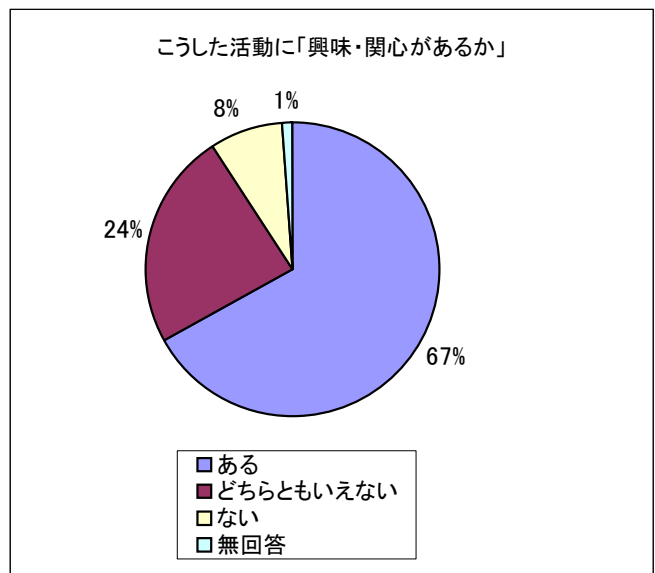
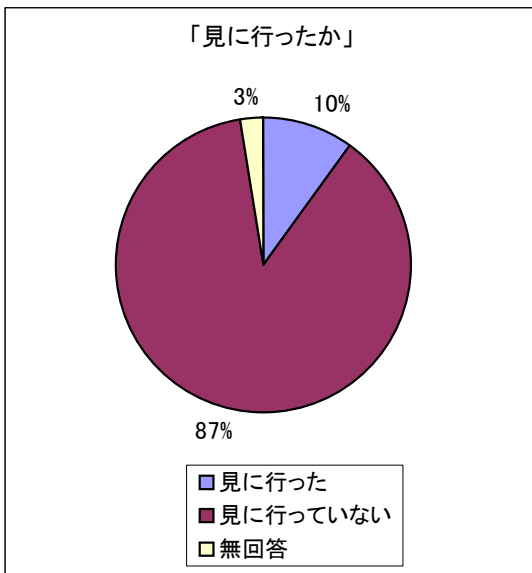
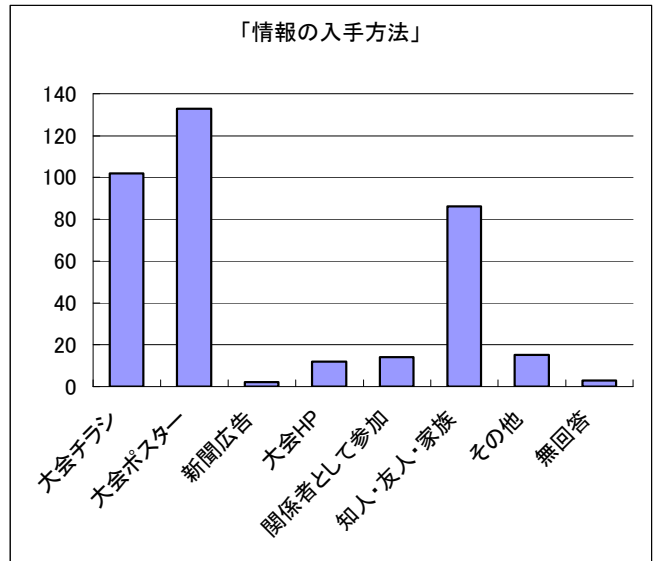
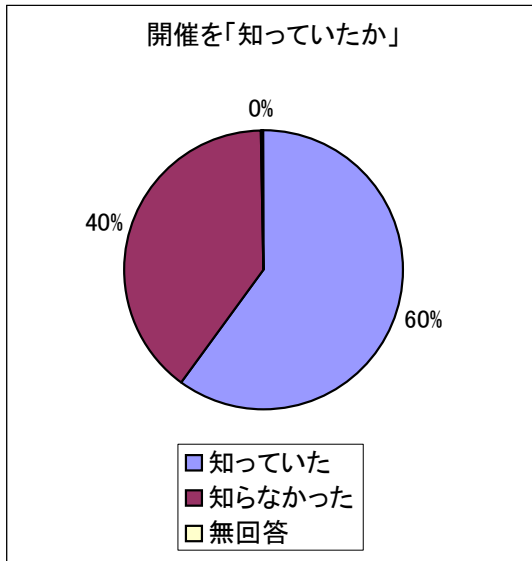
1) 調査概要

筑波大学の学生を対象に、授業・スポーツデー・体育会 etc でアンケートを行った。2003 東西インカレのダイジェスト映像と東西インカレのパンフレットを見てもらった上で、ア

アンケートを実施した。アンケートは以下の理由のため行った。

- ★ 東西インカレ事業の情報が学内でどの程度認知されていたかを調べる。
- ★ バレーボールの試みを紹介した上で、大学が地域や社会に何らかの貢献する活動に対する意見を収集する。
- ★ 2004 東西インカレのスタッフに意欲のある人を募集する。
- ★ 東西インカレ及びバレーボールの活動を学内でPR する。

2) 選択式回答結果



3) 分析・考察

○ 開催認知について

「知っていたか」

知っていると答えた学生が60%。いろいろな宣伝の効果で、高い割合をしめた。しかし、学内全体の盛り上がりが求められると思うので、今年は100%が知っていることを目標にしたい。

○ 来場について

多くの学生が、大会の開催を知っていたが、実際に会場に運んだのはそのうちの 10%にとどまった。これは夏休みに入ってから少したった時期であったのが一番の要因だと考えられる。

「行った人の感想」

生の迫力を近くで見れたことに対する感想も多かったが、それ以外のイベントに関する感想も多かった。

筑波大学が優勝したことや、つくば市に関する展示があったことで、筑波大学やつくば市への帰属意識を感じたものもいた（といえる?）。

「情報の入手経路」

会場アンケートの比較で言えることは、ポスターで知った学生が多かったことである。

学内のあらゆるところに貼ってあったことが、効果的だったといえるのではないか。

また、体育で知ったという学生や、学内で配ったチラシで知ったという学生が多いことから、実際にこちらから積極的におしかけていくことは、やはり効果が高いといえる。

2004 東西インカレではさらに攻撃的 PR を行うことが期待される。

○ 大学の地域貢献における資源について

東西インカレのアンケートであったこともあって、スポーツに関連したものが多かった。その他、研究の成果など、知的財産に関するもの、施設の公開など、大学のハード面に関するもの、学生の若さ、時間など、大学生そのものの人的パワーなどがあがった。

○ スポーツ分野からの「まちづくり」活動への関心

「ある」と答えた割合が 67%にのぼり、学生のスポーツに対する関心や、評価の高さが明らかになった。

VI. 大会報道状況

大会プロモーションビデオ制作後記

今大会では大会報告書とともにプロモーションビデオを制作しました。大会当日にただ記録目的で撮影されたにすぎないビデオテープをもとに、チーフマネージャの松田とともに、プロモーションビデオの構成を考え、ビデオというビジュアルに特化したメディアを用いて大会の魅力・目的をより多くの人に知ってもらおうと思ってのことです。松田とビデオの構成を話し合い、機材や時間との兼ね合いも考え現実的に制作できる範囲内で、「わかりやすく、大会の概要と大会実行委員会の活動を紹介できるものを」と、考えました。

もともとの撮影されたビデオテープは miniDV テープで 26 本。時間にすると 26 時間分です。それに新たに撮影された実行委員会の面々のインタビューも加えると 28 時間分にも及ぶ映像の中から、大会プロモーションビデオは 5 分、実行委員会プロモーションビデオは 30 分に収まる分の映像を選び出しました。小澤・八日市屋は芸術専門学群の学生であるので、デザインや映像のことはわかっている、バレーについては知識がありませんでしたので、松田の指導のもとに小澤・八日市屋で大量のテープからビデオに使用する映像を何回も繰り返し見て、吟味して選び出しました。今大会は 2 日間に及ぶ、多くの魅力的なイベントの詰まったものでした。よってプロモーションビデオの合計 35 分という時間では紹介しきれなかったものも数多くあったと思います。

ビデオの制作はまさに、実行委員会の他分野の人々の協力によって出来上がったものです。バレーの映像の部分ではチーフマネージャの松田とともに映像を選び、インタビュー部分ではオフィシャルジャーナリストの沼尻にインタビューをしてもらいました。映像制作は小澤と八日市屋で行いました。そして、大会に出場した選手の皆さん、大会でイベントをしてくださった出演団体の皆さん。どれがかけてもこのプロモーションビデオは完成しなかったのです。

このプロモーションビデオによって、より多くの方がこの大会に魅力を感じ、「2004 東西インカレバレーボール男子王座決定戦 in つくば」に協力してくれること、そして何より足を運んでくれればと思います。

オフィシャルクリエイター

小澤 宏行 (芸術専門学群)

クリエイティブ編集後記

「2003 東西インカレを振り返って・・・」

今回の 2003 東西インカレには企画の初期の段階から関わらせていただき、クリエイティブな分野から東西インカレのイメージを作らせていただきました。振り返ると 2002 年の 10 月ごろから活動が始まり、特に大会前は目が回るような生活で、勢いで駆け抜けてきたような気がします。

自分が今回クリエイティブの分野から参加させていただいた上でのキーワードは「魅力を共有しあう」です。バレーの競技としての魅力、可能性を秘めたつくば市の地域としての魅力、大会に関わった全ての人がそれぞれのフィールドで発揮した能力や心に持つ情熱。これらさまざまな「魅力」がこの社会全に向かって開かれた時に、クリエイティブな分野がその繋がりをつくる一つのきっかけになってほしいと思いながら活動してきました。たとえば、今までバレーに興味が無かった人でも、ふと東西インカレのポスターやウェブサイトを見て興味を持ち、大会から何かを感じ取る。そんなことも一つの小さな成功といえます。

実際の活動の中では、資金や時間との闘いが数多くありました。理想としてやりたいことはたくさんあったけれども、上手くいかなかった部分も多々ありました。また個人的な話になりますが、自分の個人としての能力に限界を感じたことも多くありましたが、同じクリエイターであった小澤さん、倉本さんを始めに本当にたくさんのスタッフに助けをいただきました。少ない人数の中で本当に委員はみな最大限の努力をしてきたと思います。

多くのスポーツイベントのように、お金をかけて外部の業者に頼れば技術的・時間的にも楽にすませることもできましたが、あえて自分たちの手作りを基本としたことで、結果として大会理念とシンボルマークは格好だけの別物ではなく、まさに実行委員会の中から生まれたものであり、表裏一体であったと思います。

大会当日の興奮と熱気は今もはっきり覚えています、あの感動は、試合としてのレベルはもちろんですが、その裏に隠されたたくさんの人がそれぞれに持っていた情熱やエネルギーが一つになっていた瞬間だったのだと思います。そしてそれを思い出した時、大会にかかわった全ての皆さんの心の中に、東西インカレの象徴としてあのシンボルマークが浮かぶことを信じています。

オフィシャルクリエイター

佐々木 絵理 (芸術専門学群)